極貧貴族の領地育成計画

カトゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
極貧貴族の領地育成計画

【Ｎコード】
Ｎ０８１０Ｔ

【作者名】
カトゥ

【あらすじ】
突然ゼロの使い魔の世界に転生した主人公。前世では大魔法使い（笑）の称号を持っていた彼が転生時に貰った特典は不老・・・下手すればブリミル教による異端認定ですね！！
広大な領地を持つ名門貴族に生まれたけど、領土は荒れ果て財政状況は目を覆いたくなるほど悪い。
そんな現状を見た主人公はあの手この手で領地の発展を目指す！！
全てはエルフ耳のために！！

※主人公は領地発展のためなら大抵の手段は使うので、原作改変も少なからずあると思います。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

原作はもうそろそろ終了になりますが、書きたくなって二次創作書いちゃいました！！

ゼロ魔の二次創作はたくさんありますが、そんな中でも自分なりの個性のある作品を書きたいと思います。

初めて小説を書くので駄文だと思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ

「君、死んだから」

目が覚めたら突然そんなことを言われました。
いきなりの出来事に僕は全く対応できないが、目の前にいる男は僕の反応など気にもせずに話し続ける。

「死んだらそれまでの肉体を廃棄して魂は輪廻に戻ることになってるんだけど、君の場合ある条件に当てはまっちゃったから特典付で転生することになったよ」

僕の目の前にいる現代の日本では珍しい袴(はかま)姿の男は、まるで世間話をするかのように重大なことを伝えてくる。

正直言って、口調と格好が一致していなくてすごく違和感を感じてしまう。

「ある条件と言うのは３０歳まで親族以外の異性と過度の身体的接触をしていないこと・・・つまり君に例えると３０歳になってもファーストキスすらまだの気持ち悪い童貞君、所謂魔法使いであることだね。

というか君の場合は４０過ぎになっても彼女いない暦＝年齢の童貞だから大魔法使いだよね」

そう言って男は馬鹿にするかのような笑顔で僕を見下した。
突然すぎてよく理解できなかったがこれだけは分かる。

袴野郎・・テメェは全ての魔法使いを敵にした!!

「まあ、そんなことはどうでも良いね。薄汚い童貞が無様に野垂れ死ぬくらいどうでも良いよ。

本題である転生については、君が死ぬ前に読んでいたゼロの使い魔という本の世界で良いよね。

・・・いちいち考えるのは面倒臭いし。
転生時の特典は不老で風邪や腹痛とかの軽い病気には罹(かか)るけどペストや癌(がん)とかの人体に対し致命的な影響を与える病気には罹らない仕様だから。

・・・といっても怪我をしたら瞬く間に再生するような不死じゃないから長生きしたければ気をつけなよ。
18歳になったら不老になるようにしておくから、それまでに色々と準備をしてね。

それと簡単に童貞卒業できないように・・・じゃなくて、君が長い生の中で寂しくならない様に生殖行為をした相手も問答無用で君と同じ不老になるから。

ゼロの使い魔の世界じゃ異端審問されそうな特典だけどね!!」

ちょっと!?こいつの言動に悪意を感じるんだけど!!
特に最後は本当に洒落にならないぞ!!?

「言語関係の知識はちゃんとつけとくから頑張ってね」

男がそう言うと僕の意識はだんだん薄れていった。まさか童貞のま

まで死ぬとこんなことになるとは・・死んでも転生できるんだから一応、運が良いってことなのか？

意識が戻るとそこは暗闇の世界だった・・・あれ？目が開かないんだけど？体もうまく動かせないし、なんかちょっと体がベトベトしてる。

「奥様！ちゃんと生まれましたよ！！元気な男の子です！！！」

「ああ、私の赤ちゃん・・・！！」

あ、言葉がちゃんと分かる！
言語関連の知識はちゃんと頭に染み込んでいるみたいだ。

まあ、そんなことよりも・・もしかして生まれたばかりなの！？

なるほど、生まれたばかりの赤ん坊なら目が開かないし体もうまく動かせないわけだ。
ていうか、納得してる場合じゃない。と、とりあえずこういう時は泣くんだよな！！？

「お、おぎゃぁ・・？」

「まあ、ちゃんと声を出してくれたわ！！」

ちょっと控えめに声を出したらものすごく嬉しそうな声がして誰かに優しく抱きしめられた。なんか、この感じは安心するな。

こう、なんというか、今、僕は包み込まれてます！！という感じだ。多分今僕を抱きしめてる人が母さんなのかな？よし、ここは気合入れて声を出そう。

「オギャア・・・ハァハァハァ」

少し疲れた。なんだか早口言葉みたいになっちゃったし・・赤ん坊にはきつかった。

「・・・なんだか早口言葉みたいでしたね、奥様。というか最後はお子様、息切れをしていらっしゃいましたよ」

やばい、メイドさんっぽい人がちょっと疑問に持ち始めたぞ！？少し調子に乗りすぎたか。

「なんてことなの！？生まれたばかりなのに早口言葉みたいに泣けるなんて・・・！

それに最後は息切れまでして・・・なんて頑張り屋さんなの！！流石は私とあの人の息子！！！」

なんか都合の良い様に解釈してくれた。これが親馬鹿という奴か？

僕がそんなことを考えていると突然扉を開く・・・もとい蹴破った様な音がした。

「セイラ!!ちゃんと子供は生まれたか!!!?」

誰かがこちらにすごい勢いで近づいてきている。これが父さんか。

「はい!!元気で頑張り屋な男の子です!!!」

母さんはそう言って僕を誰かに渡した。視覚が無いから確信できないけど、この流れだと多分父さんに渡したんだろう。

「おお、流石は私たちの息子だ!!私は偉大な息子を持てて幸せだ!!!!

イイイィィィィヤッツッフゥゥゥゥゥゥゥゥゥ」

おいおい、父さんテンション上がりすぎじゃないのか!?

「息子よ、お前の名前はセイラが妊娠した時から１０ヶ月間、毎日８時間以上ずっと考えてたんだぞ!!
お前の名はアリストだ。

アリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールだ!デュステール侯爵家の嫡男として元気に成長するんだぞ!!」

こうしゃくけって・・・公爵家か侯爵家のどっちだよ!?まあ、どちらにしてもここがゼロ魔の世界ならかなり上の方だよな。

伯爵家でさえ名門とか言われてるんだし、その上の侯爵か公爵だったら家柄で言えば文句なしだな。

こうして僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールの貴族生活が始まった。

プロローグ（後書き）

プロローグを投稿したわけですが、少し短かったですかね？

次話からはそれなりに長い文を書くと思います。

とりあえずこの小説はタイトルからも分かる通り、極貧貴族の主人公が荒れ果てた領地をあの手この手で発展させていきます。

領地経営だけでなく周辺貴族との謀略戦や他国との外交戦ももしかしたら含まれるかもしれません。

もしこれからも読んでくださるのなら、よろしくお願いします。

感想はいつでも大歓迎です。

現状確認と初めての魔法

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは今年で3歳になった。

1歳になるまでに行われた授乳やオムツの取替えは忌まわしき黒歴史として記憶の奥底に封印済みだ。

自分の顔を鏡で見てみたのだが、髪は茶髪になっていた。顔は子供の顔なので良く分からないが、前世での自分の面影が少し残っていた。良くも無く悪くも無い平凡な顔立ちだ。

これはあの袴野郎の配慮か？

・・・あの野郎に限ってそんな気遣いが出来るとは思えないな。

何にしてもあまり顔の造形が変わらなくて安心した。

イケメンになりたくない訳じゃないが、長年慣れ親しんだ自分の顔が大きく変わっていないことは思わずほっとする。

まあ、全く同じと言う訳でもないのだが、そこはしょうがない。

今まで父さんや母さん、侍女さんに執事さんの話を盗み聞きしたり、子供らしく聞いてみたりして分かったことだが、どうやら僕の生まれたデュステール家は数千年前から続く歴史ある名門侯爵家らしい。国家はガリア王国に所属している。

ゼロの使い魔はそこまで詳しく無いが、ガリア王国といえばガリア王ジョゼフ1世が弟であるオルレアン公とシャルル王子の派閥を原作開始3年位前から問答無用で粛清するから気をつけなくてはな

らない。

そして後のガリア女王になるシャルル王子の娘、シャルロット姫がタバサという偽名を名乗りジョゼフ王の陰謀で命に危険が伴う汚れ仕事をさせられているから、その時にうまいこと恩を売ってやれば後々役立つことになるだろう。

ただ、そのことがジョゼフにばれたら粛清されるからシャルロット姫、もといタバサに接触する時は慎重にしないとなぁ・・

まあ、そんなことは良いんだ。例え早急に対策を取らなければならないとしても所詮幼児の僕ではどうしようもない。

父さんたちがいくら僕を大事にしてくれているとしても、家の存続が関わるようなことを3歳児の意見で決めることはないだろう。

今、僕が考えなければならないことは不老のことだ。文化レベルが中世で、ブリミル教という宗教が蔓延(はびこ)っているここハルケギニアでは、不老になんてなれば下手すりゃブリミル教の神官たちに異端審問にかけられる。

・・・本当にあの袴野郎は碌なことをしないな。特典というか呪いじゃねえか。

だけどこの世界には僕以外でも不老っぽい奴はいる。原作に出てきたトリステイン魔法学院の学院長オールド・オスマン。

姿は仙人みたいな爺さんだが、立派な不老だ。そのことは周囲に知れ渡っているが、オスマン学院長は異端審問にかけられず、逆に伝統や格式を無駄に重視しているトリステイン王国で王立魔法学院の

学院長なんて要職を勤めている。

このことからオスマン学院長みたいに高名なメイジにさえなれば、例え不老になったとしても案外簡単に受け入れてくれるかもしれない。というか寧ろ優れたメイジとして称えられる事だろう。

まあ、僕の場合は１８歳で成長が止まるから、うまいこと誤魔化せたとしても２０代後半か３０代前半でばれてしまうはずだ。

だから魔法だけは自重せずに本気で努力することにしよう。ゼロの使い魔の魔法は精神と想像力が肝心らしい。

その点に関しては、前世で４０過ぎのおっさんだった僕はかなり有利だ。伊達に前世でのあだ名が大魔法使いだった訳じゃない。

ハルケギニアのメイジたちよ、貴様らに地球の大魔法使いの妄想力を見せてやろう！！！

・・・・・自分で言ってて悲しくなってきたな。

この話はもうやめにしよう。

そうそう、不老の他にも僕の頭を悩ませている事がある・・・

それは僕の家、デュステール侯爵家が・・・・・・・・

凄まじく貧乏だと言うことだ・・・！！！！

いや、正確に言うと領地も含めて領民丸ごと貧乏なんだよね。

土地も領民も痩せてるよ！！

ハルケギニアの平民の年間生活費は大体１２０エキューだ。対してデュステール領の平民の年間生活費は９０エキュー・・・・・・

何だこの格差は！！？

このことは偶々侍女さんたちの深刻な愚痴を聞けたから分かったことだ。

父さんに以前それについてそれとなく聞いてみたけど「お前がまだ気にすることじゃない」って言われた。

まあ、確かに今は僕も不老対策で領地のことまで考えている心の余裕は無い。

幸い餓死者やらは出てないみたいだし、領主であるデュステール家の生活も少し貧乏くさいところもあるがそこまで気にするようなことは無い。

領民の皆さんには僕に心の余裕ができるまでは今の生活のまま我慢してもらおう。

心の余裕ができたら前世の知識を生かして領地経営に尽力するのも悪くない。

とりあえず今のうちは父さんと母さんに早く魔法を習わせてくれるように頼まなくては！！

僕の命のために！！！

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは今年で４歳になった。

今日は遂に魔法を教えてもらえることになった！

貴族の子供は大抵７歳か８歳で魔法を習い始めるらしく、４歳で魔法を習えるように父さんたちを説得するのには苦労した。

普通の子供よりも圧倒的に早く言語を習得したり、機知に富んだ発言を心がけたりして自分が平均よりも優れている事を示して説得材料にした。

最終的には日本に古来より伝わる日本人の最終奥義ＤＯ・ＧＥ・ＺＡで許しを得た。

父さん達が言うには何だか良く分からないが、いたたまれない気持ちになったそうだ。

ふふん、額を床に擦り付けただけはあったね

さて、そんなことは良いとして、いよいよ魔法を教えてもらえる。

僕がいる場所は屋敷の中庭だ。中庭は名門侯爵家の名に恥じない広さがあるのだが、花は植えてなくただ雑草や木が生えてあるだけだ。というか屋敷の窓からは見えないように小さな畑がある。

貧乏臭がこれでもかと漂っている中庭だが今更なので気にしない。

「それでは今日から私が坊ちゃまの魔法の講師を勤めさせていただくジャン・ルーゼルと申します」

そう言ったのは僕の目の前にいる白髪で腰の曲がった好々爺な雰囲気がにじみ出ている老人、ジャン・ルーゼルさんだ。昔は風のトライアングルメイジとしてデュステール家に仕えていたらしい。

今は隠居して代わりに息子さんが父さんの家臣として仕えている。

今回は父さんの頼みで僕の魔法講師役に就任したらしい。

「よろしくお願いしますジャン先生！」

子供らしく笑いながら元気良く返事をする。とりあえず愛嬌を振りまいておこう。ジャンさんは僕の返事を聞いてなんだか嬉しそうだ。

「坊ちゃまは元気が良いですな。では早速魔法をお教えしましょう」

ジャン先生は魔法の説明をしだした。

曰く、魔法は貴族として必須な教養である。魔法さえ上達すれば出世しやすくなる。

曰く、我々の魔法は杖と契約し、杖を用いて行使する。杖を用いずに発動する魔法は先住魔法と言い主に異種族が使う。

曰く、魔法とは精神の強さと想像力で決まる。

「坊ちゃまは既に杖と契約なさっているので、今日は早速コモン・マジックをお教えしましょう」

ジャンさんはそう言って杖を取り出した。僕も腰に挿していた杖を取り出す。

杖は４歳の誕生日の時に父さんから誕生日プレゼントとして貰った。杖との契約はその時に１ヶ月かけてできた。普通は１週間ほどで契約できるそうなので自分の才能の無さに落ち込んだが、杖との契約にかかる時間が魔法の上達速度に関わりはしないそうなので少し安心した。

「坊ちゃま、今から私がライトを唱えますので見ててくだされ」

ジャンさんがライトと唱えると、ジャンさんの杖の先がぼんやりと光った。以前にも何度か父さんが見せてくれたが、何度見ても不思議な光景だ。

「では坊ちゃまもやってみてくだされ。頭の中で光を想像しながら唱えるのですぞ」

ジャンさんは一旦ライトを消し、僕に魔法を唱えるよう促した。

光を想像しながらか・・とりあえず懐中電灯を想像しよう。

「ライト」

杖を構えてそう唱えると、杖の先に豆電球の様な光が灯（とも）った。

「おぉ！！」

いくら精神が大人で想像もしっかりしていたとはいえ、まさか一発で成功するとは思ってなかったので自分の杖が光っている様子に思わず声を出して驚いてしまった。

ジャンさんは口をぽっかりとあけて、信じられないものを見るような目で僕の杖の先に灯った光を見ている。

「て、天才じゃ・・・」

ジャンさんが掠れ声で呟く。そりゃあ、中身は４０過ぎのおっさんですからね。子供と同じ習得速度だったらあまりにも情けなさ過ぎる。

それから魔法の練習は順調に進み、ロック、アンロック、ディテクトマジックを習得した。普通はこれらの呪文を2，3年かけて習得するらしい。

ジャンさんが言うには僕の成長速度は異常らしく、彼の長い人生の中でもこれほど早い成長は聞いたことが無いらしい。まあ、中身おっさんだからね。僕より精神や思考回路が優れている子供がいたらその子供はまさしく大天才だろうね。

ジャンさんは僕のことをガリア王国始まって以来の天才と評していたが、ある程度の年齢で転生したら誰だってこの程度のことはできると思うので、あまり嬉しくはない。

練習が終わったらジャンさんはすぐに父さんに報告しに行ったので

今夜は多分お祝いだろう。

はぁ、また余計な出費で家計が苦しくなりそうだ・・・・・・

次の日、僕は再び中庭にいる。今日は昨日と違ってジャンさんの他にも父さんと母さんをはじめ、１００人以上の家臣の皆さんが練習を眺めている。

大勢の視線が僕に集中しているのでやや緊張する。全員顔見知りなのがせめてもの救いだ。

「アリスト、このような状況で緊張することは仕方が無い。失敗しても咎めはしないので落ち着いてやるのだぞ」

そう言ったのはジャン先生の横に立っている茶髪でやや肥満気味の中年男性。僕の父親であるデュステール家当主、ソルト・デル・コネサンス・ド・デュステールだ。風のラインメイジであり今年で３９歳になる。

普段は年齢相応に落ち着いていて厳格だが、息子のことになると無駄にハイテンションになる親馬鹿だ。

というか、我が家の質素な食事でどうやったら肥満気味になれるのか不思議である。

「そうよアリスト、私とソルトの子ですもの。落ち着いてやればきっと成功するわ」

父さんの隣にいる腰まで伸びた緑色の髪を持つ女性、セイラ・ラズ

ム・ル・デュステールはそう言って僕を応援する。

今年で３０歳になる母さんは父さんと同じ風のラインメイジだ。母さんは父さんと違い常時親馬鹿だ。３歳までは親子３人で一緒に寝ていたが、４歳になったので僕が一人部屋を要求した時は本気で泣かれた。

仕方ないので少し寝にくいが今も親子３人で一緒に寝ている。ちなみに父さんは終始涙目だった。

「坊ちゃま、今日は坊ちゃまの属性を調べますぞ。坊ちゃまの才能を皆に見せ付けてやりましょうぞ！」

ジャンさんは不敵な笑みを浮かべて僕を鼓舞する。その表情からは昨日見せていた好々爺としての雰囲気は感じられず、歴戦のメイジと言われれば素直に納得してしまうほどの覇気が感じられた。

凄い張りきってますね、お爺さん。

「では、まずは錬金ですな。錬金のスペルは『イル・アース・デル』ですぞ。まず始めに私が手本を見せますので、この石を銅に錬金してみてくだされ」

ジャンさんはそう言うと、地面に落ちていた石に杖を向け『イル・アース・デル』と唱えた。

すると石は一瞬光ったと思うと、光沢を持った金属の塊に変貌していた。

なるほど、これが錬金か。日本の資源輸入問題で頭を痛めている人達に喧嘩を売っているとしか思えない魔法だな。

よし、僕もやってみよう。前世の知識を生かして頭に銅を思い浮かべる。前世の職業のおかげで結晶構造から化学的性質まですらすら出てくる。

「イル・アース・デル」

錬金のスペルを唱えると石が光り、ジャンさんと同じ光沢を持った金属に変わった。ただ、なんだか分からないが、錬金を使うと精神がどっと疲れる。

父さんたちは大はしゃぎしているが、ジャンさんは神妙な顔つきだ。

「ふむ・・成功ですな。初めてでここまでやれるなら、本来坊ちゃまには土メイジとしての才能があると言っても良いのですが、その様子を見る限り土に関しては向いていないようですな」

ジャンさんは僕の疲労を察したようだ。錬金はかなり便利で興味深い魔法だっただけに土メイジに向いてないことは残念極まりない。

まあ、向いてないものは仕方ない。親が2人とも風メイジだったことから、風とは正反対の属性である土に関しては始めから才能がないと薄々感ずいていたからそこまでショックは受けなかった。

その後、火の属性を調べるために発火の呪文を唱えたが、土に比べるとマシという結果だった。

水属性のコンデンセイション（凝縮）は火と土に比べると精神力を使わなかったから水の適正はあるらしい。

「では坊ちゃま、最後に風の魔法を試しますぞ。今日の練習はこれで最後にしましょうぞ。あの木に向けウィンドと唱えてくだされ」

ジャンさんがお手本としてウィンドを唱えるといきなり突風が起こった。標的となった木は流石に折れたりしなかったものの、葉は半分ほど突風に持っていかれてしまった。唯でさえみすぼらしい庭が更に悲惨な事になっている。

今日の魔法練習はこれで最後だし、最後に精神力を使い切るのも悪くない。流石に全部使い切っちゃうと、明日までに回復できないから半分くらい使おう。

脳内で長年封印されてきた厨二病という名の魔物を解き放つ!!

想像するは圧縮された空気の塊・・大気圧の１００倍にまで圧縮されたそれは超音速で目標まで疾走する・・・!!

かつて大魔法使いと呼ばれた私の力、今こそ示そうぞ!

・・・・・・逝くぜ!!

俺のこの手が真っ赤に燃えるぅぅぅ敵を倒せと轟き叫ぶぅぅぅぅぅうゴッドォォォォォォォフィンガァァァァァァァァァァァァァ!!!!!!

「ウィンド」

僕の精神力の半分を消費し、妄想をこれでもかと詰め込んだウィンドが杖から放たれた。

そのウィンドは地面を抉り標的の木をへし折る・・・・ことは無いが、枝はへし折った。

あれだけ精神力を消費したんだから当然と言えば当然な光景だが、それを知らないジャンさんたちはあまりの威力にポカンとしている。

「て、天才じゃ・・・・」

昨日も言ったよね、それ。

現状確認と初めての魔法（後書き）

今回は主人公と両親、魔法の先生の名前が出てきました。

今回の主人公の魔法の成長速度につきましては、皆様の納得がいかない点もあると思いますので説明させていただきます。

まずゼロの使い魔における魔法を構成する重要な要素である精神力について、子供と大人では比べるまでも無く大人に軍配が上がります。

主人公の場合、前世が４０過ぎの中年男性であり、童貞でしたがちゃんと就職していたので精神力の面では圧倒的なアドバンテージがあります。

そして想像力についてですが、確かに大抵の場合、大人と子供では子供のほうが想像性豊かなのは間違いありません。

しかし私の勝手な解釈ですが、魔法を発動する際に必要な具体的な想像については、経験や知識の差で大人の方が遥かに優れています。

例えばライトの魔法の場合、ゼロの使い魔世界の子供では太陽や月などの天体、ランプや松明などの照明器具しか想像できないでしょう。

しかし主人公の場合、前世で懐中電灯などの多彩な照明器具を見ていますし、明かりがつく原理も一般教養として知っているので、普通の子供、というよりもハルケギニアの人々に比べて圧倒的に有利です。

以上の点を持ちましてこの作品では、主人公のメイジとしての成長速度はチート乙（笑）並に早いことにしました。

もしもご不満でしたら感想にて書いてくだされば、精一杯説明する所存です。

王宮にて謁見（前書き）

どうもカトゥです。

タグにハーレムやらティファニアやら書いちゃってますが、主人公の生まれた時代は原作よりもかなり昔なので、ハーレム要員が登場するのには結構時間がかかります。

はじめのうちは領地育成や外交ばかりで色気の無い内容になると思いますが、長い目でよろしくお願いします。

まあ、主人公は前世で大魔法使いにまで昇りつめた猛者なのでヒロインが登場してもピンク色の話になるかは分かりませんが（笑）

王宮にて謁見

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは今年で7歳になり、メイジとしては風のスクウェアになった。

原作ではシャルル王子が12歳で風のスクウェアになって建国以来の大天才と言われていたから、僕の場合はどうなるんだろう？

僕は1年ごとにメイジとして1ランク上がって、7歳でスクウェアになっちゃったからなぁ。

こんなに早くスクウェアになった理由は、魔法を想像する時の具体的な想像について僕の方がハルケギニアの人間より優れていたんだろうな・・・異端だけに。

ごめん、中身はもうすぐ50歳だから許してほしい。

まあいい、なにせ風が発生する原理やら、風の性質やらを前世で知っていたからな。科学のかの字も知らないハルケギニアでは僕よりも魔法を発動する時に、頭の中で想像する具体的な魔法の効果を思い浮かべる事ができるメイジはかなり少ないんじゃないだろうか？

それこそ転生者か地球出身者くらいだろう。

あと精神が40過ぎのおっさんであることか。

最後に肉体が子供だということかな。

いくら精神が大人でも、体も大人である場合物事の習得には多大な時間と労力がかかるからなぁ。

子供の脳は柔軟で記憶力は大人よりも格段に良い。

僕の場合、体は子供、中身は大人を本当に実践しているから7歳でスクウェアなんていう馬鹿げた結果になったんだろう。

7歳でスクウェアは自分でも成長が早すぎると思うけど、なにせ自分の命がかかってるからなぁ・・・・

魔法の練習は文字通り死ぬ気でやったよ。少しでも手を抜いたら冗談抜きで異端審問だからね。

そして今まで周囲の話を盗み聞きしたり、会話の最中にそれとなく聞いてみたり質問したりして分かったことなのだが、現在のガリア王はロベスピエール3世という人物で最有力後継者はその長男のカール王子らしい。

・・・カール王子って誰だよ。

原作時に王だったジョゼフは影も形も存在しない。もちろんその弟のシャルル王子もしかりだ。

ロベスピエール3世と言えばジョゼフ王の先々代の王でヴェルサイユ宮殿を建造した人物だ。どうやら僕は原作よりもだいぶ昔に転生したらしい。

そしてクルデンホルフ大公国はまだ存在しなかった。

クルデンホルフ大公国は原作開始時にトリステイン王国の王女だったアンリエッタ姫の先々代にあたるトリステイン国王フィリップ３世によって大公領を賜って建国された新しい国家だ。

原作開始時に４５歳だったジョゼフが存在しないことからもしやと思ったが、案の定クルデンホルフ大公国は存在していなかった。

少なくとも原作より４５年以上前だということだ。

はあ・・原作までいったい何年かかるんだよ。

「アリスト、大丈夫か？
目が虚ろだぞ？」

おっと、考え事のし過ぎで父さんに心配をかけてしまったか。

じゃあそろそろ現実逃避はやめよう。

「いえ、大丈夫です」

僕は父さんに返事をして、正面にその存在感をありありと放つ豪華な扉を見た。

僕が7歳でスクウェアになったことは、ガリア国内はおろかハルケギニア中に広く知れ渡ったらしい。まあ、我が家は仮にも名門侯爵家だから当たり前だがな。

それで１ヶ月前に王宮から便りが来た。

なんでもガリア王が僕に会いたいらしく王宮まで参上せよとのことだ。ガリア王は我が家の財政状況を良く知っているらしく、旅費と

してわざわざ１０００エキューを渡されたのは名門侯爵家としては複雑な心境だった。

まあ、９５０エキューは使わずに貯蓄しましたがね！！
我が家をその辺の浪費家の馬鹿貴族と一緒にするなよ！！！

そんな訳で僕と付き添いの父さんは現在、王宮の謁見（えっけん）の間へと続く巨大な扉の前に立っている。この扉１つで我が家は使用人込みで２９年は生きていけるね。
２９という数字が僕の言葉の現実感を増しているね？

「謁見の許可が下りました。くれぐれも陛下にご無礼を働かれぬように」

１０００エキューもくれた人にそんなことするわけねえだろ。僕は心中でそっと呟く。

扉の横に立っている衛兵が僕達に注意し、扉がゆっくりと開かれた。我が家とは違い木が擦れ合う変な音は出ない。

「・・・！」

扉の先にあった謁見の間は無駄に広く、荘厳な雰囲気に包まれていた。

部屋の入り口からまっすぐと延びる真紅の絨毯は、貧乏生活が染み付いた僕では思わず踏むのを躊躇ってしまうほど高級感が溢れている。

絨毯の横には、お前ら絶対その格好では戦場に出ないだろ、と突っ

込んでしまいそうになるほど華美な装飾が施された制服を着ている衛兵たちが列をなしている。

衛兵たちの目には好奇な色が感じられた。恐らく7歳でスクウェアになった僕に興味を抱いているのだろう。

謁見の間には衛兵たちの他にも少なくない数の貴族が控えており、その誰もが僕に視線を向けている。

そして何よりも視線が強いのは・・絨毯の向こう側、あれ一つで城が買えるんじゃないかと思ってしまうほど豪華な玉座に座るハルケギニアの最大国家ガリア王国の頂点に君臨する人物、ロベスピエール3世だ。

過酷な政争を勝ち抜いて王座に座っているだけあり、その雰囲気には王者としての風格がある。

玉座は他よりも1段高い床にあり、僕と父さんは玉座から15mほど離れた場所で跪(ひざまず)く。

そのラインから先には衛兵が存在しないので分かりやすい。

「面をあげよ」

渋みのきいた声が静寂に包まれた謁見の間によく響く。

「はっ」

ロベスピエール王の言葉と共に僕たちは顔を上げた。

初めて近くで見たロベスピエール王はガリア王家特有の青い髪で端正な顔をしたおっさんだった。前世だったら小さな声で「クソッ垂

れのイケメンがっ」と呟いていたところだが、今そんなことはしない。

「デュステール候、手紙にも書いたが貴様の息子が齢7歳でスクウェアになったと耳にしてな、予もその傑物を見てみたいと思ったまでよ。遠路はるばる御苦労だったな」

「はっ、勿体無きお言葉にございます！！」

ロベスピエール王は父さんの返事を聞き満足げに頷いた。その様子は凄く偉そうだった。まあ、実際偉いんだけどさ。

「では、デュステール候の息子よ、名はなんといったかな？」

ロベスピエール王は僕に視線を向けた。その眼光は過酷な政争を潜り抜けた経験を物語っているかのようにかなりの鋭さを持っている。

こんな視線を向けられたらただの7歳児じゃあ、下手すりゃ泣くぞ！！

「はっ、私はデュステール家が長子アリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールです。

此度は陛下のご尊顔を拝見する機会をいただき大変ありがたく思う所存です」

とりあえずこれだけ言えりゃあ十分だろ。ロベスピエール王の表情を見ると少し驚いた表情をした後ににやりと笑った。

「ほぉ・・・・１０にも届いておらん子供が予の視線を受けてなお、

そのような返答ができようとは・・・

噂を耳にしたときはまさかと疑っていたが、どうやらスクウェアというのは真のようだな。

だがどうせならば、７歳の子供がスクウェアスペルを使っている１０００年に一度あるかないかの珍しい光景を見たいのでな。

試しにこの場で偏在をしてみるがよい」

ロベスピエール王が衛兵に何らかの合図を送ると、１人の衛兵が僕に杖を差し出してきた。

差し出された杖を確認すると、王宮に入る際に取り上げられた僕の杖だった。多分、僕に魔法を使わせることははじめから決まっていたのだろう。

僕は立ち上がり杖を構える。謁見の間にいる１００人以上の人間が僕に視線を集中させる。以前、実家での練習中にもこのような状況はあったが、それとは比較にならない重圧を感じる。

とても７歳の子供が魔法を唱えられる状況ではない。

だが、僕は中身が４０過ぎのおっさんだ。

しかも前世でのあだ名は大魔法使いだ。

なら・・ここ、ハルケギニアでも大魔法使いになってやろうじゃないか！！！

日本物質化学研究所（通称魔法使いの花園）序列９位『呪殺の大魔法使い』橋本渉いざ参る！！！

「では、僭越ながら私の魔法をご覧下さい・・・ユビキタス・デル・ウィンデ！！」

僕の周りを一瞬光が包む。いつもと違い精神が高ぶっているせいなのか、その光は普段よりも強く感じられた。

光が収まった時、僕の隣には僕と全く同じ姿の偏在が５体存在していた。

「見事だ！！！」

ロベスピエール王は偏在の成功を確認した途端、玉座から立ち上がって僕を褒めた。

「ありがたきお言葉にございます！」

僕と偏在たちは一斉に跪き礼を述べる。自分からは見れないが、なかなかにシュールな光景じゃないだろうか？

ロベスピエール王の声に続くように謁見の間には僕を褒め称える声が響いている。

隣にいる父さんの顔を横目で見ると、それはもう嬉しそうだった。

唇がプルプル痙攣してますよ、お父さん。

その夜、王宮では晩餐会が開かれた。出席者は僕のことを建国以来

の天才やら始祖ブリミル以来の大天才と褒め称えた。

晩餐会に出てきた食事は実家では見たことも無いほど豪華なもので、僕はついつい食べ過ぎて晩餐会の後半にかなり苦しい思いをしたことは、貧乏貴族ゆえの苦労だろう。

翌日、王宮を発つ際にロベスピエール王自らが見送りに来てくれて杖をくれた。

貰った杖は原作でタバサが持っていたような僕の身長よりもだいぶ大きい木製の杖で、恐らく１ｍ５０ｃｍくらいあるのではないだろうか？

持ち手の先端は円形の輪になっており、輪の中心には黄金でできた金具で固定されている巨大なサファイアがある。

多分これ一本でデュステール家の生活費（使用人込み）１００年分は軽く補えるだろう。

父さんはあまりにも高価な褒美に失神しかけたし・・・

馬車の中でロベスピエール王から貰った杖を持ってくれている父さんの手がプルプルと震えているのはきっと馬車の揺れのせいだけではないだろう。

ああ、貧乏って本当に嫌だ・・・

Ｓｉｄｅ　ソルト・デル・コネサンス・ド・デュステール

「アリスト、大丈夫か？
目が虚ろだぞ？」

大国ガリアの中枢、首都リュティスの中心に鎮座する王宮。その中でも際立って華美であり威風を放つ扉の前で、私は隣にいる息子に声をかけた。

「いえ、大丈夫です」

そう答えた愛息子（まなむすこ）の名はアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステール。

僅か４歳で魔法を習い始め、その３年後にはメイジとして最上級のランクであるスクウェアに到達した魔法の天才だ。

一生かけて魔法を修練してもスクウェアに届かぬものがいる中、この子は７歳でスクウェアにまで成長した。

これは６０００年もの歴史を持つハルケギニアでも空前の快挙だ。
属性こそ始祖ブリミルが使ったとされる虚無ではないが、その才能は間違いなく始祖ブリミルに準ずるものだろう。

その才能は王の耳にも届いたらしく、一目でも見たいと言うのでわざわざ王宮まで参上したのだ。

デュステール家の状況を詳しく知って以来、もはや王宮なぞ縁の無い場所と思っていたが・・・・

一度で良いからこの大国の頂点に君臨する王に会ってみたい。幼い頃に抱いた夢が、まさか息子が叶えてくれようとはな。

流石は私の息子と言うべきか。

「謁見の許可が下りました。くれぐれも陛下にご無礼を働かれぬように」

扉の横に立っている衛兵がそう言うと、目の前の扉はゆっくりと開く。

謁見の間に入った瞬間、中にいる人間達の視線が息子に集中した。

そのどれもが好奇の色を含んでおり、息子をまるで道化を見るような目で見ている。

苛立たしい・・！！

息子は見世物ではないのだぞ！

ああ、叶うことなら今すぐ彼奴らの首をへし折ってやりたい。

だが、そのようなことをすれば私のみならず、息子にも処罰が下ることになるだろう。

口惜しいが、今は耐えるしかない。

なにやら王と会話をしたような気がするが、そのような些事はどうでも良いのだ。

私は一刻でも早く周りの馬鹿どもに息子の偉大さを知らしめてやりたいのだ！！

「・・・・・だがどうせならば、7歳の子供がスクウェアスペルを使っている光景を見たいのでな。

この場で偏在をしてみるがよい」

おお、ようやく息子がその力を周囲の無能に教えてやる時が来たぞ！

さあ息子よ、王宮のアホ共にお前の力を見せ付けてやるのだ！！

息子は杖を持つと、すぐに偏在を唱えることなく精神を落ち着けているようだ。

ふふ・・・せっかちな馬鹿共を焦らしているのだな・・！

だが息子よ、私も我慢ならんのだ・・・早くお前の実力を見せてくれ！！！

私の想いが通じたのか、息子はその瞳に覚悟の炎を燈す。

おお、立派な顔つきだ。私は誇らしいぞ。

「では、僭越ながら私の魔法をご覧下さい・・・ユビキタス・デル・ウィンデ！！」

息子の周りを一瞬光が包む。なんだか普段より光が強い気がするが、きっと気のせいだろう。

光が収まった時、全く同じ姿の息子が6人存在していた。

あれ？息子の偏在はいつも2，3人じゃなかったっけ・・・？

・・・

・・・・・

・・・・・・・・・

気のせいだな。息子はきっと普段から偏在を6人ほど出現させていたはずだ。

流石は私の息子！！！

「見事だ！！！」

王が玉座から立ち上がって息子を褒め称える。

大国ガリアの王に私の息子が褒められた！！！私は自分のこと以上に嬉しく感じた。ああ、今すぐ息子を抱きしめてやりたい！

「ありがたきお言葉にございます！」

息子は奢らない態度で王に対し礼を述べた。

ああ・・息子よ、立派に成長したのだな！父は嬉しいぞ！！！

謁見の間にいる馬鹿共も息子を口々に褒め称える。

ふんっ・・・先ほどまで息子を散々馬鹿にしたような目で見おって！！

貴様らがどのような言葉を吐いても私は全く嬉しさを感じんわ！！

このとき、私の唇が震えていたのは厚顔無恥な馬鹿共への怒りからだと思いたい。

王宮にて謁見（後書き）

今回で主人公が生まれた大まかな年代が判明しました。ついでに主人公の前世の事も少し出てきましたね。

主人公が謁見したガリア王ロベスピエール３世は原作時のガリア王ジョゼフ１世の先々代にあたり、ヴェルサイユ宮殿を建造した人物です。

現在、原作時に４５歳だったジョゼフは影も形も存在しておりません。

そしてクルデンホルフ大公国はアンリエッタの祖父であるフィリップ３世に大公領を賜って建国されました。

このことからも分かる通り、主人公が生まれたのは原作開始から５０年以上前になります。

ハーレム形成はまだまだ遠い道のりです。

デュステール家の事情（前書き）

感想の中に周囲の人間の心境を見てみたいというものがあったので、前回の話の最後に主人公の父親サイドを入れてみました。

急いで書いたので駄文っぷりがいつにもまして発揮している、粗悪なできになってしまったかもしれませんが、よければ読んでください。

読まなくても作品を理解する上で不便な点はありませんので、無理に読まなくとも大丈夫です。

デュステール家の事情

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは今年で8歳になった。

半年以上前に王宮にて僕がスクウェアであることを証明して以降、国内はもちろん国外の多くのパーティーに招かれた。

流石は魔法至上主義の世界と言ったところか。

僅か7歳で風のスクウェアになり、始祖ブリミル以来の天才と謳われている僕は、どこのパーティーに行っても多くの参加客に取り囲まれ多くの貴族たちと交友を交わすことができた。

しかし不思議なことに娘を紹介し、あわよくば僕に嫁がせようとする貴族は少なかった。

なかには娘を嫁がせようとした貴族もいたのだが、2回目に会う時に嫁がせる気はすっかり失せていたようだ。

別に、嫁がせようとしない貴族が僕に娘を紹介しない訳ではない。

紹介するにはするのだが、その仕方は娘と僕を結婚させると言うよりも友人として仲良くさせようとしているのだ。

これには疑問を持たざるを得ない。

魔法至上主義のハルケギニアで魔法使いという点では、自分で言うのもなんだが僕よりも有力な人物は少ない。将来性を考えればトッ

プを独走状態だろう。

家柄としても大国ガリアの数千年前から続く由緒正しき侯爵家であり申し分ない。

まあ、実態は古いだけの貧乏貴族なのだが・・・

それでも見過ごすには惜しい優良物件だと思うんだけどなぁ。

まさか前世での大魔法使いとしての風格が滲み出ているから？

・・・流石にそれは無いか。

不思議に思った僕は、風のスクウェアの実力を活かし父さんの書斎や屋敷の書庫に忍び込んで情報収集をした。別に原因を解き明かして令嬢たちにもてたい訳じゃない。

本当だよ？

水属性ではラインの実力があるので、風に比べると微力ではあるがその力も駆使した結果、今まで知らなかったデュステール侯爵家の事情と言うものが分かってきた。どうやら我が家はただの貧乏侯爵家ではないらしい。

数千年前、デュステール家はまだ伯爵家でトリステインとの国境に領地を持っていたらしい。

当時は財政も苦しくなく、土地も肥沃で王宮や軍にもそれなりの影響力を持っていたらしい。

だがその状況は２０００年ほど前に一変する。

当時、聖戦が発動されておりデュステール家も当然ながら出兵した。ハルケギニアの国力を総動員するのだから当たり前である。

そしてその時の戦いで偶然ながらエルフの軍を相手に連勝するという大手柄を立ててしまい、爵位が侯爵に昇格し領地もガリアで１，２を争うほどの広大な領地に転封（てんぽう）されたらしい。ご先祖様すごいね。

本当だったらデュステール家としては万々歳で大国ガリアの中でも大貴族としての地位を磐石な物にしていただろう。

だが、世の中決して甘くは無かった。

変更先の領地はエルフが住む砂漠（サハラ）との境界に位置しており、確かに面積ならばガリアでも１，２を争い下手な小国よりも広いのだが、土地は度重なるエルフとの戦いにより荒れ果てていた。

そんな場所に多くの人間が住んでいるはずはなく、領民の数は伯爵時代よりも少ないうえに碌な商業すら存在しなかった。一応聖戦に参加する空中艦隊を整備するための大規模な港や造船所があったらしいが、聖戦終結後に需要が無くなり廃れたらしい。

それから２０００年ほどの月日が経ち、エルフとの最後の戦いから数百年たった今でも領地の状況は転封当時とほとんど変わりが無い。

書庫の資料を見る限りこれはデュステール家の躍進を嫉んだ大貴族の画策らしい。

その貴族の名はセリューネ公爵家。

本来であれば我が家にとって仇敵といっても良いのだが、書斎で父さんの手紙を見た限りでは、デュステール家はセリューネ公爵家に頭が上がっていない。

どうやらかの公爵家は他の貴族たちが娘を僕に嫁がせないように圧力をかけているらしい。

内心の怒りを抑えてセリューネ公爵家についての資料を見てみる。

領地は我が領の近くであり面積こそデュステール領の半分ほどだが、人口は２０万を超えているらしく総資産は５０００万エキューを軽く越えているらしい。うわー。

王宮への影響力は大きく、軍でも親族の何人かが要職を勤めているそうだ。

えっ、我が家？なんか遠い親戚に軍で中間管理職やってる人がいるらしいよ。

中間管理職という言葉に少し共感を感じるね。多分佐官か尉官だろうね、将官じゃあないな。

数千年以上前から続く名門であり、王家との婚姻も１回や２回ではない。セリューネ公爵家はまさしく大貴族だろう。

我が家かい？もちろん我が家も数千年以上前から続く名門侯爵家だからね！

１回か２回は王族に触った事があるんじゃないかな？

・・・・・なるほど、確かにいくら魔法の天才でもセリューネ公

爵家を敵に回してまで貧乏貴族の息子に娘を嫁がせる貴族は少ないだろう。

父さんの手紙を見る限り僕はセリューネ公爵家の４女と結婚する予定らしい。うん、あからさまに軽く見られているね。一応、僕は長男でガリア建国以来の大天才だよ？

僕の１０歳の誕生日に４女と会って婚約発表をするそうだ。へー、初耳だー。

手紙の文面はセリューネ公爵家の一方的な通達であり、傘下貴族への手紙と思われても不思議ではなかった。

これを知った当初はセリューネ公爵家に対する深い憤りと共に、一体何故こうなったのかと言う疑問を持ったが、それも調査を進めていくうちに理由が分かってきた。

デュステール領は土地が荒れ果てているので、作物が良く育つはずが無く農業は芳しくない。

その結果、人口を維持できるだけの食料は得られず、餓死者が大量に発生してしまうだろう。

それを防ぐために周囲の領地から食料を大量に購入するのだが、その大口取引先がセリューネ公爵家であり、他の取引先貴族も大半がセリューネ公爵家の傘下貴族だった。

過去にご先祖様の中にはセリューネ家に従うが我慢ならず、他の貴族と食糧輸入を取引したそうだが、輸送の際にどうしてもセリューネ公爵派の領地を通らねばならず、『偶然』山賊に輸送中の食糧を

奪われることが頻発したそうだ。

空中輸送などでセリューネ公爵派の領地を通らずに食糧を輸送することもできるのだが、その場合、輸送費が高騰し貧乏貴族のデュステール家では必要な量の食料が買えなくなり、本末転倒になってしまう。

そんなことがあって以来、デュステール家はセリューネ公爵派と食料取引を続けている。

そしてその食料購入費はデュステール家の財政に重くのしかかっており、領の財政が逼迫している大きな要因の一つだ。

実はデュステール家の財政が逼迫している大きな要因はもう一つある。

デュステール家はエルフとの境界に位置するということで、エルフの攻撃に備えてそれなりの軍備も整えなくてはならない。

これは領地を賜った際に当時の王と教皇から命じられたことでもある。

なのでこの費用は削ることができず、結果、領の収入の半分が消えることになる。

もちろんこれは装備の維持費と調達費、聖戦発動時に使用される施設の整備費であり、兵士の訓練費なんて金のかかる要素は入っていない。

結果的に装備こそ立派だが訓練も満足に行えないほど財政状況が悪

いので見掛け倒しの弱兵になってしまい、これもセリューネ公爵派から侮られる要因になってしまっている。

一応、王宮からは軍事費として幾許かの財政援助は受けているが、それで軍事費全てが補えるわけでもなく、我が家の財政は逼迫している。

というか王宮からの援助金が途絶えたら、デュステール家は間違いなく破産するだろう。

もちろん、そんな状態の我が家が王宮で権力闘争などできるはずも無く、デュステール家は今では名ばかりの名門貴族になってしまった。

とりあえず以上が僕の調査の結果分かったことだ。

僕はスクウェアになったことでようやく貰った1人部屋にて、今まで分かってきたデュステール家の状況を整理し終え、ほっと一息ついた。

どうやら僕の家は想像以上に厳しい立場に立たされているようだ。

こりゃあ、ただ領地を発展させれば解決できる問題じゃあないな。

このままだと僕は見たことも無いセリューネ公爵家の4女と結婚させられてしまうだろう。

セリューネ公爵家が今までデュステール家にしてきた仕打ちを考えると、結婚なんて断固拒否だが、今の状況では拒否が許されることはないだろう。

幸い7歳でスクウェアになったことは周囲に知れ渡っているし証明もされた。

僕の不老がばれる頃には、間違いなく僕はオールド・オスマン並みに高名なメイジとしてハルケギニア中で有名になるだろう。

異端審問回避の最低条件は達成したわけだ。

これからは魔法の練習は控えて、領地経営に乗り出してみるとするか。

まずは父さん達の説得だが、あの子供に甘い人達のことだ・・・渋るとは思うが、最終的には許可してくれるだろう。

前世の職は研究員で、ゼロの使い魔の世界では全く活用できないものを研究していたが、趣味は読書だったからそれなりの知識はある。

実家は農家だし、退職後は田舎で悠々自適なスローライフを過ごす予定だったから、農業の知識もそれなりにあるつもりだ。

流石に婚約には間に合わないが、僕が結婚しなければならない時までにはまだまだ時間はある。

その時までにセリューネ公爵家の要求を拒否できる力を蓄えなければ、前世も含めれば５０年間守り続けてきた童貞を奪われることになってしまう・・・！！！

別に童貞を捨てたくないわけじゃあないが、気に入らない奴らの思い通りになってむざむざ童貞を捨てるのは、とてもじゃないが我慢

なら無い。

そんなことになったら前世で魔法使いとしての心構えを教えてくれた大賢者殿や共にリア充撲滅運動を繰り広げた同期の賢者にとてもじゃないが顔向けできない。

見てろよセリューネ公爵家、お前達に俺の童貞道を阻ませはしない！

もはや大魔法使いを超越し、童帝（わらべのみかど）にまでなってしまった僕の力で屈服させてやるわ！！！

・・・あーあ、自分で言ってて悲しくなってきた。

今日はもう遅いし寝よ・・・

デュステール家の事情（後書き）

話の中で主人公は独自の調査を行いました。

中身は５０歳だとしても８歳児に機密文書を見られた名門侯爵家ってどうなのよ、という違和感を持たれた皆様のために説明させていただきます。

まず、デュステール家は名門侯爵家といっても実態は貧乏貴族なので、家の中にいる衛兵はそこまで多くはありません。

そして衛兵の側から見れば、主人公は身内であり、風のスクウェアだとしても赤ん坊の頃より知っている子供であるので、警戒度は大幅に下がります。

その隙をついて主人公は偏在を使って書庫や書斎に忍び込んだ訳です。

もちろん、息子に甘い両親に頼み込んで書庫などに入ったりもしたので、魔法の実力だけを使って調査をした訳ではありません。

以上が一応の理由ですが、不満に思われる方は感想にてお願いします。

できる限り説明する所存であります。

今回の話で主人公の実家であるデュステール家の事情が判明しました。

事情を知った主人公はいよいよこの作品の主題である領地経営に乗り出そうとするわけですが、どうなるんでしょうね。

多くの感想、ありがとうございます。作品を書く上で大変励みになっております。

感想はいつでも大歓迎です。

領地の財政状況

領地経営に参加する決心をした翌朝、僕は早速父さん達に領地経営に参加させてもらえるように頼んだ。

「父さん、そろそろ私も領地経営に参加してみたいです」

貧相な食卓だが、それでも家族そろっての和やかな朝食の時間、僕の言葉を聞いた両親はいきなりの事で困惑した表情になった。

「アリストよ、突然どうしたのだ？

お前はメイジとしていくら優れているとしても、まだまだ子供なのだ。

大人の仕事は気にせずに、今は自分の好きなことをしていなさい」

父さんは僕の言動に困惑しつつも、僕を気遣って今はまだ好きなことをやれといってくれている。

「そうよ、アリスト。

家は少し貧乏だけど、これ以上貧乏になることはないし・・・

アリストが無理をする必要は無いのよ？」

母さんも僕を気遣ってくれている。

確かに両親の言う通り、既に貧乏な家がこれ以上貧しくなることは無いだろう。

僕としても今の生活に不満はないし、本当だったら僕も領地経営なんて面倒臭い事はやらずに最近興味を持ち始めた水系統の魔法の練習をしていたい。

ついでに水の秘薬を作って小遣い稼ぎもしたい。

だが、今の生活のままでは駄目なのだ。

「父さん母さん、私にはどうしても成し遂げねばならない目的があります。

もちろん純粋に領地を豊かにしたいという思いもありますが、その目的のためにも、デュステール家が今のままではとても困るのです。なので僕も領地経営に参加させて欲しいのです」

そうなのだ。デュステール家が今のままでは、僕はセリューネ公爵家の４女と結婚しデュステール家も僕諸共、忌々しいセリューネ公爵家の勢力に取り込まれてしまうだろう。

僕はそれを防ぎたい。そのためにはデュステール家に力をつけて貰わねばならないのだ。

父さん達は僕の返事を聞いてさらに困惑を深める。

朝の食堂を沈黙がしばらくの間支配した。やがて、父さんが口を開いた。

「アリスト・・・お前が何をしたいのかは分からない。

だが私達はお前がやりたいことを見つけたのなら、それを全力で応

援するつもりだ。

お前の目的のために領地経営に参加したいのなら、私はできる限りの便宜を図ろう・・・」

父さんが渋々といった感じで僕に許可を出してくれた。
母さんも仕方ないわね、といった感じの表情をしている。

「ただし！！

いくらなんでも先祖代々守ってきた領地を失うようなことになっては、ご先祖様に申し訳が立たんからな。

何かする時には必ず私に相談するように！
分かったな？」

父さんがいつにも増して真剣な声で僕に言う。

これにいいえと答えたのなら、いくら親馬鹿でも僕が領地経営に参加することを許しはしないだろう。

もちろん僕もこの言葉は予想していたし反対するつもりは無い。むしろ妥当な判断だと言える。

「分かりました。

今日のうちは領の詳細な資料について目を通したいので、資料を見せてもらっても良いですか？」

今までデュステールの状況について調査したものの、流石に最新の

ものや細かい点まで書かれた書物を見ることはできなかった。
６５００年間文明が停滞しているハルケギニアなので、たった数年や数十年ではあまり大きな変化はないと思うが、それでも確認はしておきたい。

「良いだろう。

昼前には用意をしておくので、昼食の少し前に執務室に来なさい」

「はい、分かりました」

これでいよいよ僕も領地経営に参加するわけか・・・何とかなれば良いんだけどなあ。
僕は無駄に固いパンを齧りながら今後の事を考えた。

今日は父さんから貰った資料に一通り目を通してみたが、改めてデュステール領の状況がどれほど劣悪なのかが再確認できた。

デュステール領はガリア王国の北東端に位置しており、エルフが住む砂漠（サハラ）とゲルマニアに隣接している。

面積は２４００アルパンほどで、ｋ?でいうと８０００ｋ?・・・群馬県のおよそ１，２５７倍だ。

何度も思うが、広さだけは立派である。

土地の６割は荒地で、領民は荒地の上に街を築いたり荒地を無理やり農地として利用したりしている。

荒地を無理して農地として使用しているので、作物の収穫量はひどく少ない。ご先祖様たちは何度も土地の改良を試みたが、食糧生産量の関係上休耕期を設ける事ができないため、せっかく改良しても次第に土地が痩せていき失敗に終わったそうだ。

３割は森林地帯であり、オーク鬼などの危険な亜人も数多く生息しているようだ。

そのため森林地帯とその周囲に集落はもちろん畑も築かれておらず、森林地帯は人間の手が届かぬ秘境となっている。

この巨大な森林はゲルマニア側にまで続いているのだが、ゲルマニア側の領地もデュステール領に負けず劣らず寂れているので、ゲルマニアにおいても森林は開拓されないままの未開の地となっている。

こちらの森もご先祖様たちは装備だけは無駄に充実した軍を使って亜人を追い払い開拓しようとしたそうだが、次から次へと湧いてくる亜人の物量と財政が貧弱な事による補給の限界により尽く失敗している。

残りの１割は山岳地帯であり、ゲルマニアとの境界線の森林地帯以外の場所を塞ぐ様な形で存在している。

標高３０００ｍにまで届きそうな山々は、ゲルマニア側と我が領の陸上における交通路を完全に遮断している。

戦時では天然の防壁として大変心強い存在になるのだろうが、平時では邪魔な障害物でしかない。これさえなければゲルマニア側から食糧を輸入できるのだがね。

その麓からは少量の風石が採掘されるが、領の財政を支えるほどの利益には成り得ていない。

風石の採掘規模を拡大したいが、そんな金はどこにも無く依然として採掘量は少量だ。この採掘場は領地の片隅にあり、採掘された風石の輸送が面倒なのも、採掘場拡大に踏み切れていない要因のひとつだ。

領民は約５００００人であり、平均生活費は年間９０エキュー。

領内で採れる食料はだいたい２５０００人分ほどで、需要の半分しか満たしておらず残りは周囲の領地から輸入している。

人口の９割５分以上が農民であり、商人はデュステール家の屋敷がある街にしか存在せず、デュステール家の役人が月に１度領内の村に食料を運び込み、それを売っているのが現状だ。

軍事力はフネが１０隻に龍騎士が２０騎とメイジで構成された家臣団６００人。字面だけ見れば小規模国家とならば充分に戦える数字だ。

名門侯爵家の名に恥じない戦力だが、実態は金欠のせいで碌に訓練ができない張りぼての軍隊だ。

家臣団や龍騎士は個々人の努力である程度の技能は培われているが、フネは風石を消費するので全く飛ばさない。

家臣団と龍騎士についても装備が消耗してしまうような戦闘訓練は行わないので、メイジとしての実力は低くないのだが、兵士としての戦力は傭兵にすら劣るかもしれない。

デュステール家の収入はおおよそ１４０万エキュー。このうち３０万エキューは王家からの補助金である。

しかしその半分は軍事費に消える。

残りの７０万エキューのうち６０万エキューは食料輸入費に消える。

そして余りの１０万エキューは役所施設の維持費、街道の最低限の整備費、森林地帯から時々襲来する亜人の撃退費用などの様々な諸経費により消費されてしまう。

ついでに領主一家の生活費は侍女さん達の給料を除くと年間８００エキューほどである。

領地すら持たない下級貴族に比べるとマシだが、原作で魅惑の妖精亭にて看板娘のジェシカが１週間のチップレースで稼いだ金額が１６０エキューほどだった事を思うと、思わず泣きたくなってくる。

ガリアが誇る名門侯爵家（開国以来の大天才もいるよ）の年間生活費が、町の料亭の看板娘が貰ったチップ５週間分というのは余りにも悲しすぎる。

デュステール領の詳細を把握した訳だが、我が領は本当に余裕が無

いようだ。

まあ、余裕があったらもう少し生活も楽になるのだが・・・

とりあえず資料には人口の正確な数字は記されていなかった。

なにせ文明レベルが中世なので、人口管理が確立されていないのだから当然といえば当然なのだが、デュステール領の場合は他の領に比べて人口の正確な数字を調べる事はより重要な意味を持つ。

食糧の輸入はデュステール家が取り仕切っており、領民の経済状況から買値よりも安い値で輸入した食糧を売っている。

なので正確な数字が分からず必要量よりも余分に食料を購入してしまうと、それだけ領の財政に負担をかけてしまう。

領内の人口と収穫した作物の量の正確な数字が分かれば、余分に輸入してしまう食糧はほとんどなくなることだろう。

そうなれば食糧輸入における無駄な出費を極力抑えることができる。

さらに領の正確な人口を調べ、戸籍登録を行う事によって丼勘定（どんぶりかんじょう）だった税金の徴収がより正確に行われ、今まで見逃してしまっていた税金の取りこぼし分を最小限にすることが可能になる。

そうなれば多少なりとも財政の負担は減る事になるだろう。

とりあえず資料を見て、取り掛かれそうなことは戸籍登録くらいか・・・

しかし資料にあった森林地帯は気になるな。

開拓する事さえできれば、食糧問題は大きく進展するかもしれない。

装備を消耗するような戦闘さえ行わなければ、龍騎士に頼めば連れて行ってもらえる。

今日はもう遅いし、明日の昼にでも行ってみるとしよう。

領地の財政状況（後書き）

今回の話では領地の具体的な面積やだいたいの人口が出てきました。

余りにも逼迫された財政状況に、主人公は戸籍登録の実行を決定したところで手詰まりになっちゃいましたね。

主人公はどうやってこの状況を打開するのでしょうか？

ストーリーは遅々として進みませんが、まだまだ見放さずによろしくお願いします。

感想やアドバイスなどは大歓迎です。

作品の中で疑問や不満に思った点もできる限り答えますので、これからもよろしくお願いします！！

領地探検と森林

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステール８歳はただ今快適ではない空の旅に苦しんでいる。

僕が住むデュステール家の屋敷はまるでサツマイモの様な形で縦長のデュステール領の真ん中よりも南の辺りに位置している。

領地は無駄に広いので、北部のゲルマニアとの境界に存在する森林地帯までの道程は屋敷から馬車で向かうには遠い。

スクウェアの僕ならフライで往復できない距離でもないけど、８歳児の体力では移動だけで疲れて、とてもじゃないが森林の調査まではできないだろう。

だから父さんには竜騎士の装備の消耗を早めるような戦闘をしない事を条件に、竜騎士による森林地帯への移動の許可を貰った。

領内の森林地帯に行く許可を取って竜騎士に乗せて行って貰うことが決まった所までは良かったんだ・・・

竜騎士による移動は移動時間や労力を考えれば最適な選択だろう。

だけど風竜の背中に乗せて貰って空を飛び始めた事で状況は変わった。

竜の体は硬いので、鞍をつけていても乗り心地が悪いのは仕方ない。

それは我慢できる。

だけどさ、風が痛いんだよ・・・

竜の中で最速と言われる風竜は、およそ時速２００ｋｍで飛んでいる。

現代のジェット旅客機が時速９６０ｋｍ、太平洋戦争時代の輸送機でさえ時速はだいたい３００ｋｍなので、地球出身者にとって時速２００ｋｍで飛ぶ風竜は大した事ないだろうと思ってしまう。

僕もその例に漏れず、風竜を舐めていた。

バイクで時速１００ｋｍのスピードを出した時、ヘルメット無しでは目を開けられないほどの風圧を感じるだろう。

風竜はその倍の速さで動いていて、当たり前だが風除けなんて便利なものは付いていない。

しかも僕は万が一にも飛行中振り落とされないように、前で騎士に抱きかかえられる様に座っている。

なので凄まじい風圧が８歳児の肉体に直撃するのだ。

一応、風メイジだし風圧を軽減する魔法をかけてあるのだが、時速２００ｋｍの前ではいくら軽減されているとしても体にかかる風圧は大きい。完全に風圧を消す事もできるのだが、如何せんそんな事で精神力を使って探索に支障をきたしたくはない。

竜に乗る前は飛行中にのんびり領内の景色でも見ていようと思ったのだが目なんて開けてられない。

僕は森林地帯に着くまでの1時間、風圧による苦痛にひたすら耐えた続けた。

「クソ！
風竜なんてもう2度と乗らないぞ・・」

森林地帯の手前で龍から降りて、ようやく口が開いて出てきた言葉がこれだった。

竜騎士はそのまま僕の護衛として森林の探索についてくるので、彼に聞こえないように呟いた。僕の脳裏に帰り道という言葉が浮かぶが、忘れる事にした。

降りた直後は僕の身長よりも大きい杖で体を支えなければ立っていられないほど消耗していたが、肉体を行使した訳でもないので比較的すぐに回復できた。

竜は降りた場所に繋いでおき、僕と護衛の2人は森まで歩いていく。

森の入り口に着くと、僕と護衛はフライを唱えて上空から森を探索する。

竜に乗りながら探索できれば楽なのだが、残念ながらそれはできなかった。

風竜は速いのだが、その代わり体力が少なく飛行時間が他の竜に比べると短いのだ。

これが竜の中で最強と名高い水竜ならば、長時間の飛行も可能なのだが無いものねだりをしても仕方が無い。

僕は風のスクウェアだし護衛も風のトライアングルなので、風系統の呪文であるフライの持続時間は長い。
途中で何度か休憩を挟めばスクウェアの僕はもちろん、トライアングルの護衛もフライでの探索は可能だ。

フライで森の上空６０ｍほどの場所を飛行する。速度は３０ｋｍほどだが、森の中を歩くのに比べれば十分速い。

見下ろせば鬱蒼と茂る木々が視界を埋め尽くす。屋敷の周囲の土地は緑の少ない荒地ばかりなので、この森にいるとまるで違う領地にいるような感覚に襲われる。

いつかは屋敷の周りも緑豊かな土地にしたいものだ。

まあ、いつになるかは分からないがな。

僕の後ろで飛行している護衛の彼は、顔まで覆われている鎧のせいで表情は分からないが、疲れている気配を感じる。

フライで飛び始めてから既に1時間経つし、重い鎧をつけたままの彼が疲れるのも無理は無いか。

「疲れたし、そろそろ休憩にしようか？」

一旦空中で静止し、自分が疲れているよう装って僕が声をかけると彼はすぐに了承した。どうやらかなり疲れていたみたいだ。

僕たちは森の中で開けた場所・・・はないので、一旦森に降りて僕がエア・カッターで木を切り倒して場所を作った。

本当だったら護衛がやるべき仕事なんだが、疲労困憊の彼にやらせるのも酷だろう。

彼は申し訳なさそうに謝ってきたが、気にするなと言っておいた。

ここでは貴族としての体裁を気にする必要はないので、護衛の癖に主人に労力使わせるな、といった彼を責める気持ちは一切無い。

休憩中、暇なので彼と少し雑談をしたらなんと彼は僕の魔法の講師だったジャンさんの息子さんだったことが分かった。

名前はケビン・ルーゼル、今年で４０歳になり2人の子供がいるそうだ。

２６歳の時にジャンさんの友人の娘だった今の奥さんに一目惚れし猛アタックの末、翌年結婚したそうだ。

どうやらケビン君は妖精にはなったが、魔法使いには至らなかったらしい。

けっ！・・半端物が！！！！

かつて呪殺の大魔法使いと呼ばれた元大魔法使い、現童帝（わらべのみかど）の僕としては軽蔑せざるをえないが、これだけ言っておく。

おめでとうケビン君、魔法使いにならなくて良かったな！

あれから森林地帯の探索を続け、途中で何度か休憩を挟んだが森林の大まかな様子が分かった。

人の手が全く加えられていなかったので草木が繁茂し、オーク鬼などの亜人も数多く生息する。

深部になると見るからに樹齢１０００年は軽く越えているだろう巨木が数え切れないほど生えており、最高級の秘薬の材料になる貴重な草木が至る所に生えていた。

まさに宝の山であり可能ならば全てを持ち帰りたかったのだが、深部まで来るのにトライアングルのケビンは精神力をかなり使ってしまい新たな荷物を持って森の入り口まで帰る余裕は無かった。

なので僕だけが持てる限り取ったのだが子供の体であり、なにより無駄に大きな杖を持っているので少ししか持つ事ができなかった。

それでもデュステール家の生活費１年分にはなるので、これからは頻繁に森に来る事にしよう。

できればフネを使って採取できれば良いのだが、そんな目立つものを使えば森に住む大量の亜人を刺激してしまい、貴重な草木の採取どころではなくなってしまう。

竜騎士隊による採取も目立ってしまうし、竜の飛行音は意外と大きいので場合によってはフネよりも亜人を刺激してしまうだろう。

それに体の大きな竜では草木に覆われた森林地帯深部に下りることはおろか、巨木の枝の間を飛行することさえ叶わないだろう。

原作でタバサの使い魔である風韻竜のシルフィードほどの大きさならば枝の間を飛行できそうだが、幼竜であるシルフィードに対し軍の竜は成竜なので体も大きいのだ。

巨体では枝の間を飛行することなどできない。

それでもフネや竜騎士による採取を強行した場合、刺激されて集まった大量の亜人に貴重な草木が荒らされてしまう。

風のスクウェアが何人もいれば亜人に気づかれることなく採取できるのだが、スクウェアなんて滅多にいるものじゃない。

デュステール家にはトライアングルですら片手で数えるほどしかおらず、スクウェアは僕だけだ。

外部のメイジを雇えれば良いのだが、いくらメイジの多いガリアでもスクウェアなんて王宮騎士団か軍の精鋭部隊にしか在籍しておらず、稀に魔法学院の教師として存在するくらいだ。

他にも貴族の家臣としてスクウェアは存在するが、貴重な部下をそう簡単に手放すほど貴族は馬鹿ではない。

なので採取は僕にしかできず、僕の持ち帰る量では到底領の財政を支えるだけの金額にはならないだろう。

僕は思わず帰り道の休憩中にため息をついた。

森の深部で見つけた宝の山は採取方法が1つしかなく、その方法の採取量は極めて少量だ。

森林調査を行う前は森を切り開いてゲルマニアとの交易路を造れないかと思ったが、森は予想以上に巨大で危険だ。

大量の資金を使い、それだけの危険を冒してまでゲルマニアとの交易路を造る価値は無い。

セリューネ公爵家による食糧輸入という弱みから開放されるのは魅力的だが、その前にデュステール家が破産するだろう。下手をすれば住処を破壊され怒り心頭の亜人たちにより領地を更に荒らされかねない。

結局、森林地帯調査での収穫は極少量しか採取できない宝の山を確認できただけか・・・

そこまで期待していなかったものの、本当に碌な収穫が無かったので虚しい気持ちになる。

まあ、落ち込んだところで良い事がある訳でもないし、ケビン君もある程度休息できたようだしそろそろ出発するか。

「いやあぁぁぁぁぁぁ・・・・・」

僕がよっこらせ、と杖を使い腰を持ち上げたところで遠くから女性の悲鳴らしき音が聞こえた。

原作でワルドが風メイジは音に敏感だと言っていた様な気がするが、まさにその通りであり、もしも僕が風メイジでなかったなら悲鳴らしい音を聞き取る事はできなかっただろう。

僕はケビン君に目を向けたが、どうやら風メイジといってもトライ

アングルの彼には聞こえなかったらしく、えっ、休憩もう終わりなんですか？みたいな顔をしている。その能天気な間抜け面が今は憎い。

場所は前人未到の森の中だし、もしかしたら僕の空耳かもしれないが、ここで空耳だと思い見過ごしたら後々気になって後悔する事になる。

そんな思いをするくらいなら無駄足になるかもしれないが行ってみる方がマシだと言える。

僕は、もう少し休みませんか坊ちゃん？という顔をしているケビン君を放って悲鳴が聞こえた方角にフライで飛び去った。

「えっ！？どこに行くんですか坊ちゃん！！？」

背後でケビン君が慌てているが、僕の動きは止められないぜ！

私は生まれてからずっと森の中で両親と一緒に暮らしている。

オーク鬼などの亜人はよく出るけど、家族全員が魔法を使えるので簡単に撃退できる。

家にある本や両親から話を聞いて森の外についてある程度は知っている。

いつか森の外を見てみたいが、森の中での生活も満足しているのでどうしても森の外に出たいという訳ではない。

私は食料の確保や亜人の撃退など大変ではあるが両親との幸せな生活がいつまでも続くと思っていた。

だけど今日、家族3人での昼食を食べ終わったところでオーク鬼の襲撃を受けた。

亜人の襲撃なんて今に始まった事でもないので軽い気持ちで迎撃をしたのだが、今日に限っていつもなら多くて10体ほどで襲撃してくるオーク鬼がいくら倒しても後から続々出てくる。

オーク鬼はなにか興奮している様子で明らかに普段の襲撃の時と様子が違っていた。

そういえば今日は木が倒れる音が何度も聞こえたから、それが原因なのかもしれない。

終わる様子の無いオーク鬼の襲撃に私はよほど疲れていたのだろう。

いつもなら戦闘中に考え事なんてするはずも無いのに、つい気が逸れたせいで私は足を滑らせて転んでしまった。

その際に呪文のスペルが途切れてしまい、魔法が発動できなくなった。

オーク鬼は私の攻撃がやんだのをチャンスと思ったのか、私に殺到する。

呪文の詠唱は間に合わない。

あぁ・・私はここで死ぬんだな。

そう思って覚悟を決めたが、私に殺到していたオークの一団が突然飛来した幾多の巨大な氷の杭によって一掃された。

父は土のスクウェアで母は水のトライアングルなので、恐らく母が危なくなった私を見て助けてくれたのだろう。

私は突然の攻撃に混乱している残りのオークを土弾（ブレッド）で掃討しつつ、母に目を向ける。

「・・・えっ」

私が目を向けた方向には、オークの棍棒で頭部を破砕され、無残にも地面に倒れて死んでいる母がいた。

訳が分からない。何故母が死んでいる？私の方がランクは上だが、母は私よりも遥かに強いはずだぞ？

私を助けたから？私を助けるために自分は死んだの？

気づくと私は地面にへたり込んでいた。

「い・・・い、いやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

私の悲鳴でまた別のオークの一団が私に向かってくる。

しかしそのオーク達は巨大な銅のゴーレムにより押しつぶされた。

「何をしてるんだサラ!?今は自分が生き残る事に集中しろ!!」

私の悲鳴を聞きつけて駆けつけた父は、かつて母だったものを見るも、私を守るために必死で戦っている。

そうだ、私も戦わないと・・・

父の必死で戦う姿を見てようやく私も自分のやるべきことを思い出した。

未だに動揺はおさまらないが、このまま足手まといになっていい訳にはいかない。

私は震える足で何とか立ち上がった。

「逃げろ!!!」

ようやく立ち上がった瞬間、父の怒鳴り声が聞こえ、気づいた時には父に突き飛ばされていた。

「きゃっ」

私は受身も取れずに地面に転がった。

何事かと私を突き飛ばした父を見ると、オークの石斧によって体を

潰され既に息絶えた父がいた。

それまでオークを蹂躙していたゴーレムが倒れる。

オークの一部は倒れたゴーレムに巻き込まれたが、そんなものは極一部だ。他のオークはこの場で唯一の敵である私に迫ってくる。

「あ、ぁあ・・・」

もはや言葉にすらなっていない音が私の口から漏れる。

母に続いて父までも私を守るために死んでしまった。

つい昨日まで幸せだった日常が今は見るも無残に崩壊している。

既にオークは私の目の前まで来ており、どれほど詠唱が速くても魔法は発動できない。

動揺に支配された私は振り上げられた血のついた石斧をただ恐怖に染まった瞳で眺めている事しかできなかった。

本来ならば石斧は私の頭蓋骨を砕き、私は永遠の眠りについた事だろう。

だが、石斧を振り上げたオークが巨大な何かで殴られたかのように、後ろに吹き飛んだ。

「大丈夫ですか！！？」

何が起きたのか分からず思考停止状態の私の前に空から降り立った

のは、身の丈を越えるほどの大きな杖を持ち、茶髪の青年と呼ぶにはあまりにも幼い少年であった。

はじめて見た家族以外の人である少年は、風の魔法を使い周囲のオークを吹き飛ばし、切り刻み、押しつぶしていく。

私はその姿に言い様の無い安心感と胸が焦がれるような憧憬を覚えた。

肉体だけでなく精神的にも限界だった私は、その気持ちに身を任せ意識を失った。

領地探検と森林（後書き）

どうもカトゥです。

主人公が初めて竜に乗って酷い目に遭いました。

８歳児の体で時速２００ｋｍの風圧は厳しいですね。大人でもきついですが（笑）

それを考えると、原作のワルドはヘルムも着けずに風竜で全速飛行していたのはすごいですね。

今回の話では主人公の魔法の講師であるジャンさんの息子さんと謎の女性が出てきました。

領地復興に役立つものも発見する事だけはできましたし、なんとか光明らしきものも見えたのではないでしょうか？

まあ、現時点ではあまり役に立ちませんでしたが（笑）

何はともあれ、本作品をこれからもよろしくお願いします。

感想やアドバイスなどいつでも大歓迎です！

主人公の初実戦

さて・・・この状況、どうしようか？

突然の介入者に警戒し、距離をとって僕を囲む大量のオーク鬼に冷や汗を流しながらも僕は考える。

微かに聞こえた悲鳴に駆けつけてみれば血塗れの女性にオークが襲い掛かっていた。

思わずエア・ハンマーでオークを吹き飛ばし女性の近くに降りたのだが、女性は僕を見るなり倒れこんでしまった。

周囲を取り囲むオークに警戒しつつも、チラリと女性を見るが腕が無いなどの特に目立った外傷は無いようだ。

しかし全身血塗れなので何らかの外傷を負っている可能性が高い。

周りの状況をよく見てみると、３桁は下らない数のオークの死骸と２つほど人間の死体がある。

金属光沢を持った黄色の巨大な金属塊はゴーレムの残骸か？

地面は抉れ、幾多の木々がへし折れている。

それらは戦闘の激しさを物語っているが、その中でも元は家らしき残骸はこの森で生活しているものがいた事実を示している。

この場に転がっている二つの死体と僕の背後にいる彼女が恐らく生

活していたのだろう。

しかし何故このような危険で不便極まりない森の中で生活しているんだ？

例え森の深部にある貴重な草木のことを知っていたとしても、これだけのオークを倒せるほどの能力を持った彼女たちならば、もっと住みやすい場所があるはずなのに・・・

何らかの事情があるのか・・・

「グオオォォォォォォ」

思考の途中で、遂に今まで僕への攻撃を躊躇っていたオーク達が僕に向かって突撃してきた。

距離が離れているので奴らの攻撃範囲に入るまで幾許（いくばく）かの時間はあるが、普通に迎撃していたのでは背後で倒れている彼女という足枷を持つ僕では勝算は低いだろう。

だが僕は風のスクウェアだ。

原作でトリステイン魔法学院の講師であるギトーは風系統が最強であるとか何とか言っていたが、僕は大いに賛成する。

確かに風系統は色々と応用が利くが、火系統の様に広範囲の敵を一瞬で焼き払う事などできない。

土系統の様に様々な物質を生成し、操る事もできない。

水系統の様に傷を癒し、他者の精神に介入する事もできない。

虚無系統の様に暴力的な攻撃をしたり異世界を行き来したり、記憶を改ざんしたり魔法を解除する事もできない。

だがね・・・風にも、他のどの系統も真似できないことがあるのだ！！！

「ユビキタス・デル・ウィンデ！」

僕が偏在を唱えると一瞬光に包まれ、次の瞬間には僕と全く同じ姿をした偏在が４体存在した。

謁見時の様に５体の偏在は精神力の問題で無理だが、それでも戦力的には全く問題ない。

僕と偏在は女性を中心に円形陣を構築する。

オーク達は四方八方から僕達に向かって来ており、その数は３桁に届くかもしれない。

対する僕は風のスクウェアだが、今まで大事に育ってきた為に実戦なんてしたことが無い。

しかし初の実戦を前に僕は全くと言って良いほど恐怖を抱いていない。むしろようやく戦闘が行えることに歓喜すら感じていた。

なにせ今まで異端審問のことやセリューネ公爵家のこと、実家が抱える様々な問題でかなりストレスが溜まっているのだ。

もしもオークが僕に殺意を向けていないのなら殺す事に躊躇いを感じるのだろうが、オーク達は僕を殺す気で向かってきている。

これで心置きなく存分に戦える。

オークの雄叫びと地を踏み鳴らす音が支配する世界で、僕は初めて味わう闘争の空気に思わず口角が釣りあがる。

「デル・ウィンデ」

僕と偏在、5人の声が重なり合いエア・カッターが発動する。

不可視の風の刃はそれまで圧倒的存在感を放っていたオークの軍勢を一瞬で醜悪な肉塊に変える。

僕たちは攻撃を止めることなく、エア・ニードルでオークを一体ずつ潰していく。

オークの先鋒はあっという間に崩壊した。

もしも僕が風以外のスクウェアだったなら、これほど簡単な迎撃は行えなかっただろう。

もしかしたら多方向からのオークの攻撃によってあっさりと押し潰されていたかもしれない。

風系統・・・その戦闘での真価は偏在による多方面への並列した対処だ。

自分と全く同じ能力を持った者が、多方向からの複数の攻撃に対し、

平行して処理していく。

一見地味だが、戦闘においてこれは圧倒的な存在感を示す。

僕は果敢に突撃してくるオークの群れを迎撃しながらしみじみとそれを実感した。

オーク達は僕達の苛烈な迎撃によってほとんど前進できておらず、ただ死体の山を築いていくだけだ。

しかしこの戦闘方法は僕の精神力をすごい勢いで消費していく。

偏在は唯でさえ維持に精神力を消費し、戦闘では偏在も魔法を使うのでその分精神力を消費する。

結果、短い戦闘でも多大な精神力を消費する事になるのだ。

オークはあれだけ始末したのにも拘らず次から次へと湧いて出てくる。

これでは僕の精神力が尽き、オークに蹂躙される事はほぼ決定事項だ。

僕は迎撃を偏在たちに任せ、草木の入ったリュックを女性の両肩にかけて倒れている女性を背負う。

血で僕の服が汚れるが、そんなことは構わない。森林地帯の調査で来たので今の服は普段着よりも粗末だ。

女性は８歳児の僕にとってかなり重かったが、何とか背負う事はで

きた。

女性が落ちないように気をつけながらフライで空に上がる。

眼下では十分な高度が確保できたので魔法の使用を止めさせた偏在達がオークの群れに飲まれかけていた。

偏在はオークの攻撃により次々と消滅し、あっさりと全滅した。

僕はそれを視界の端で見届けながらケビン君が待っているであろう場所まで飛行する。

僕が勝手に飛んで行った場所で呆然としていたケビン君は、空から降りてきた僕と背中にいる血だらけの女性を見て驚愕した。

ケビン君に事情を説明し、改めて竜がいる場所まで飛行を再開した僕達だったが、ケビン君の精神力不足の為に女性は僕が背負わなければならず、女性を落とさないように気をつけて飛行したので竜がいる場所場でついた時は、すでに太陽は沈んでいた。

竜に乗っての帰り道は、女性の体にあまり負担をかけないように行く時の半分の速度で飛行したので、屋敷に到着したのは夜中の１１時だった。

父さん達はあまりにも遅い帰宅時間のせいで僕が帰った瞬間、文句

やら心配したやら、その血塗れの女性はなんだとか言っていたが、僕は父さん達に草木の入ったリュックを押し付け理由は明日話すと伝えて女性をレビテーションで浮かせて僕の部屋まで運んだ。

多分ケビン君がうまい事当座の説明をしてくれるだろう。

デュステール家は貧乏なので、客人の予定が無い限り客間の掃除はしておらず、埃等が溜まっていて客間はすごく汚い。

怪我をしているかもしれない女性をそんな場所で寝かせる事はできない。

僕の部屋の扉を開く。

天蓋などの余計な飾りはついていないシンプルなベッドと机、衣装ダンスだけが置かれている物寂しい部屋だが、客間よりかはマシだ。

僕は自分のベッドが汚れることを無視して、自室のベッドに女性を寝かせた。

僕は女性の体に外傷がないか改めて見たが、女性は血と土で全身が汚れているが多少の擦り傷はあっても特に治療が必要なほどの外傷は無かった。

見たところ骨も折れている様子は無い。

女性が特に怪我をしていないことにホッとする。

改めてベッドで寝ている女性を観察すると、彼女がとんでもない美人だという事が分かった。

これまでは慌てていた事もあって分からなかったのだが、血と泥で汚れていてもなお整った顔立ちはその美しさを失っていない。

前世も含めて５０年ほど生きているが、ここまでの美人に会ったのは初めてだ。

僕が彼女の顔立ちに思わず見とれていると、だんだん僕の視界が狭まってきている事に気づいた。

今日は竜に乗って酷い目にあったり、森林地帯を深部まで調査したり、生まれて初めて実戦を経験したり、血塗れの女性を助けたり様々な事があった。

８歳児の体はもはや限界なのだろう。

僕は襲い来る眠気に抵抗する事もせず、あっさりと意識を暗転させた。

「・・・むぅ・・ぅん」

私は窓から差し込む朝日によって目が覚めた。

今、私はどこで寝ているのだろう？

私の体は木の板の上に敷いた薄い布団ではなく、信じられないくらい柔らかくて暖かい布団に包れている。

できる事ならいつまでもこの感触を味わっていたいが、だんだん脳が覚醒してくるにつれて、そうもいかなくなった。

これはなんだ?私はこんなに柔らかい布団など知らない。

何故私がこれほどの布団で寝ているんだ?

私は寝る前の記憶を探った。

「・・・・ぁ」

そして思い出した。

私を助ける為に頭部を粉砕された母、私を庇ったせいで体を潰された父。

かけがえの無い2人が、私のせいで死んでしまった事を・・・

私は思わず跳ね起きた。もしかしたらこの柔らかい布団は寝ぼけた私の想像で、本当は全て夢であり、目を覚ませば布団は今までと同じ薄くて硬い物。両親もいつも通り私の両隣にある布団で寝ているかもしれない。

「そんな・・・」

だが、そんな私の希望はあっさりと打ち砕かれた。

私の家がすっぽりと入ってしまいそうなほど広い部屋、窓には両親から聞いた事のある透明な壁みたいなものであるガラス。

部屋の家具はベッドと机、タンスだけだが、明らかに私の家に有った物よりも上質なことがわかる。

そして私の腕についた血と土は、寝る前の出来事が現実である事をありありと示していた。

「あぁぁぁ・・ぁあぁ」

私は両手で顔を覆う。幼い時にしか流した事のない涙が溢れ、口からは嗚咽が漏れる。

本当だったら大声で泣いてしまいたいが、ここが知らない場所だということもあり、大声を出す気にはなれない。

私は声を押し殺して静かに泣いた。

主人公の初実戦（後書き）

すみません、少し更新が遅れてしまいました。

理由としては、最近急激に仕事が増えてしまい中々執筆作業に入る事ができなかったのです。

まあ、言い訳ですけどね。

この小説の更新を待っていてくださる皆様には申し訳ないです。

できる限り2，3日に1回は投稿したいですが、もしかしたら遅れてしまうかもしれません。

こんな作者で申し訳ありませんが、これからも本作品をよろしくお願いします。

感想、疑問、アドバイスなどは大歓迎です。

恩人と従者（前書き）

更新が４ヶ月以上遅れました申し訳ありません。

私生活が忙しかったんです。

はい、いい訳ですね、すみません。

恩人と従者

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールの朝は無理矢理押し殺したような女性の鳴き声によって訪れた。

えっ・・どんな状況？

寝巻きに着替えもせず床で寝ていた僕は寝起きゆえに未だ思考がうまく働かない。全身が鉛で出来ているかのように重く、間接の節々が痛む中のっそりと起き上がってベッドの上を見た。

ベッドの上では血やら泥やらで汚れた美人の女性が泣いていた。一瞬思考が停止しかけるが、次の瞬間には一気に思考が覚醒する。

ああ、思い出した。確か昨日彼女を連れて帰ってそのまま寝ちゃったんだっけ。

僕が昨晩意識をなくした直前の状態のままだったということは、どうやら父さん達は僕が今日事情を話すと言ったことを信じて昨晩は僕を放っておいてくれたらしい。本当に助かる。

まあ、ケビン君がうまく説明してくれたんだと思うけどね。よくやったケビン君！

汚れた平民がベッドで寝て貴族の長男が床で寝ているなんて光景を見られたらかなり面倒な事になるだろう。父さん達は平民の扱いが酷くはないけど、かといって平民に優しくも無い。

あの親馬鹿な人たちのことだ、彼女に対し怒りをぶつけるに違いな

い。まっ、そんな事になってもせっかく助けたんだし、僕は彼女を庇うけどね。

父さんたちには昨晩放っておいてくれた代わりに今日は昨日のことを根掘り葉掘り聞かれそうだが、その苦労は仕方ない。どうせ昨日の調査結果は話すつもりだったし、領民の戸籍管理などもその時に提案できるのだからむしろ丁度良い。

ああ、でも面倒臭い事になるんだろうなあ。戸籍調査といってもお金はかかるし、領地が無駄に広大な分それなりに時間もかかる。恐らく始めは反対されるだろう。僕は今日起こる面倒事を想像してため息をはく。いや、昨日見つけた収入源のお蔭で調査費用は何とかなりそうだけどね。

僕が今日起こる面倒事に気分を落ち込ませていたが、気分を入れ替え一向に泣き止む気配がない女性に意識を向ける。

昨日助けた現場に2人分の人間らしき死体があったから、彼女が悲しんでいる原因は恐らくそれらだと予想がつく。

童貞暦が長い分、女性を慰めた経験なぞ無いがこのまま泣かせるわけにもいかないな。

よし、とりあえず今はこの人を泣き止ませるか！

僕は童帝ゆえに女性に対してヘタレな根性に活を入れて両手で顔を覆って泣いている女性に声をかけた。

「いかがしましたかな、お嬢さん？」

「いかがしましたかな、お嬢さん?」

今まで私の泣き声だけが聞こえていたのに突然話しかけられた事で、私は思わずビクついてしまった。
反射的に顔を覆っていた手を下げてしまうが、視界は涙で霞んでいるので声の主を確認できない。

「おっと失礼、驚かせてしまいましたな」

声質から言って男性らしい声の主はそう言って私の下半身にかかっていた純白のシーツで私の涙を拭いた。優しく涙をぬぐっている男性の手つきは、幼い時泣き止まない私をあやす父を髣髴させ、余計に涙が滲み出る。
しかしそれでも男性は私の涙を拭き続けてくれたお蔭で、ようやく男性の姿を確認できた。

土埃で汚れている短めの茶髪に緑色の目、本来なら白く柔らかいのであろう肌は私と同じく土と血で汚れている見た目１０歳前後の少年だ。
着ている服はぼろくないが土と血で汚れている分、みすぼらしさを感じる。まあ、私も人のことは言えないが。

しかし雰囲気にはどこか気品が感じられ私に比べてこの少年の育ちの良さが伺われた。
私が寝ているフカフカのベッドやシンプルながら所々に装飾があるこの部屋から考えるに彼は身分が高いのではないのだろうか。そう

いえば外の世界には貴族と呼ばれる人たちがいるそうだが、もしや彼がそうなのでは？

「落ち着かれましたか？」

彼は穏やかな顔つきで私を気遣ってくれる。この少年の落ち着いた優しい表情は、悲しみで不安定になっていた私の心を安堵させるには十分だった。というか、この少年は本当に１０歳前後か？私がこのくらいの年齢の時は、これほど落ち着いてはいなかったし今でも彼ほど落ち着いてはいない。

そんな少年に比べ、私はようやく落ち着いてきたというのにうまく声が出ず、幼子のようにただ頷く事で少年に答えた。

「そうですか、それは良かった。貴方にとっては目が覚めたら突然見知らぬ場所にいて訳も分からぬ状況だと思いますので、とりあえずこの場所と私の説明をしておきましょう。

ここはガリア王国デュステール侯爵領領主館での私の私室。

そして私はデュステール侯爵家嫡男、アリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールです」

そう言って少年は私を安心させるかのように優しく微笑んだ。

これが私、サラが彼の名を知った瞬間だった。

あの後、サラと名乗った彼女に昨日の顛末を説明し、彼女も自身の事情を説明してくれた。そのお蔭で彼女について様々な事が分かった。

彼女は両親と3人で森に暮らしていたらしく、なんと両親共にメイジで彼女も土のスクウェアで水のトライアングルらしい。まあ、確かにあの森で生活するなら優秀なメイジである事は納得だ。

両親のほうもスクウェアのメイジで、優秀だったらしい。何故そんな彼女たちが態々危険なあの森の中で生活していたのだろう？

彼女たちなら軍に仕官するにしろ、貴族に仕えるにしろ、商会に召抱えられるにしろ好待遇で迎えられるはずだ。少なくともデュステール家よりも裕福な生活が送れる。

あっ、ヤバイ。今度は僕が泣きそうになってきた。

彼女にその事を聞いてみたところ、彼女は生まれた時から森で生活していたらしく、何故森で生活していたのかは分からないそうだ。

「なるほど・・大まかな貴女の事情は分かりました。ご両親の事は真に残念です。

・　・・ふむ。

森の中は貴女1人で生活するには厳しい環境ですし、かといって外に出ても失礼ながらあまり世間を知らない貴女がうまく暮らしていけるとも思えません。

私としてはせっかく貴女を助けることができたのですし、このまま見捨てるのは心苦しい。
いかがでしょう？
貴女さえ良ければ我が侯爵家で働きませんか？」

僕がそう言うと彼女は鳩が豆鉄砲を食らったかのように驚いたが、次の瞬間には困惑した表情になった。

「貴方の申し出は大変嬉しいのですが、窮地を救っていただいた身の上でこれ以上ご好意に甘えさせていただく訳にはいきません」

申し訳そうな表情で彼女はそう言うが、もちろん僕だってただの好意でこんな提案をしたわけじゃない。
これから領地経営をする以上、スクウェアメイジなんて逸材を放っておく訳にはいかない。いくら優秀でも人間1人の力なんて微々たるものだが、それでも彼女の力は希少であり強力だ。今のデュステール家では彼女の力が大きく役に立つ事だろう。

「しかしそれでは貴女の身の上が心配だ。このまま貴方を見捨てたら私はこれから後悔で悩まされ続けるでしょう。

もしも私が貴方を助けた事に恩を感じているのなら、どうか我が家に仕えて私を支えて欲しい」

僕は膝の上に置かれていた彼女の手を両手で握り締め、懇願するように言った。まあ、実際本気で頼み込んでいるんだけどね！

すると彼女はやっと僕の想いが伝わったのか、照れたように顔を俯かせた。

「分かりました・・私みたいな者で良ければ、貴方に使えさせていただきます」

よし、土のスクウェアメイジ、ゲットだぜ！！

「そうか！ありがとう！！

じゃあ、まずはお風呂に入ろうか」

「えっ？」

彼女はまたもや鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情をする。

「僕も君も昨日は汚れたまま寝ちゃったからね」

僕がそう言うと、彼女はようやく自分の体についている土やら血を思い出したのか納得の表情になった。

僕とサラはお風呂で汚れを流した後、衣服を着替え終わると時刻はちょうど朝食の時間になっていた。

僕は物置にあった屋敷の侍女服を着せたサラを連れて食堂に向かう。

道中では貴族に仕える上での常識をある程度サラに教えておく。

サラは貴族については本で得た知識の他に両親から僅かな情報を与えられただけらしく、あまり良く分かっていなかったので、結構基本的な部分から教えた。

僕が与えた知識に一々反応し、興味深げな様子で聞いているサラを見ていると前世での後輩達のことをふと思い出す。

そういえば研究所の廊下を歩っていた時も後輩とこうやって話していたなあ。魔法使いとしての心構え、妖精になった時の心情、大魔法使いと賢者の違い・・・今となっては手の届かない遥か遠い異世界での過去だ。

「アリスト様、大丈夫ですか？」

昔を思い出し、少し沈んだ気持ちになっていた僕をサラが心配そうに見ている。貴族の令嬢でも滅多に見る事ができない透き通るような白い肌、それ以上に白い長髪を持った現実離れした美貌を持つ女性。まるで宝石のように紅く煌(きらめ)いている真紅の瞳が暗い表情の僕を映している。

童貞の中の童貞である僕でも思わず引き込まれてしまいそうになる。これでは童貞の誓いを交わした仲間たちや呪殺の大魔法使いという称号を与えてくれた童帝(わらべのみかど)に顔向けできないな。

「ああ、すまない。少し考え事をしていた。もう大丈夫だ」

僕が笑みを浮かべてそう答えると、彼女は安堵したように笑みを浮かべて目の前にある食堂へと繋がる扉の取っ手に手をかける。

さて、頑張って父さんたちを説得するかな。

僕は自身に気合を入れながらサラが開けてくれた扉をくぐり、既に両親が待っている食堂に入った。

改革の芽生え

「――ふむ、なるほどな。
大体の事情は分かった。」

昨日の報告を聞いた父さんはそう言って鷹揚に頷いた。表情こそ侯爵家当主たる厳格なものだが、その雰囲気が心なしか柔らかいのは僕の気のせいという訳ではないだろう。僕が昨日森の奥地で見つけた新たな収入源が、父さんの雰囲気が柔らかい原因だろう。

「サラといったか？その娘の処遇についてはお前に一任しよう。」

父さんがその言葉を言った事で、肩の荷が1つ下りた僕はようやく安堵できた。これで彼女は名実共に僕の従者になり、彼女の今後の生活を安定させたものに出来る。

しかし僕にはまだこの場で父さんに話す事があるので、まだまだ安堵したままではいられない。気を引き締めなくては！

「ありがとうございます。それと今まで領地の詳細を調べていて、私が考案した領地改革案を聞いて欲しいのですが――」

そうして僕が話した改革案は2つだ。

1つ目は領民の戸籍管理と領内の耕作地の収穫量調査。

これによりデュステール家が輸入すべき食糧の正確な数が判明し、食糧輸入において余剰分を最小限にすることが出来る。さらに今まで見逃していた税金を徴収する事も可能になり、領内の状況を見る

に僅かだと思うが歳入を増加する事ができる。

領民も食糧輸入のためと言われれば、生活と直結しているので誤魔化す事はないはずだ。デュステール領は群馬県の1，257倍と言う無駄に広大なので調査にそれなりの費用と時間がかかり、さらに管理にも人員的、財政的にある程度の負担を強いられるが、僕が後2，3回森の奥地に飛べば費用は補完できるはずだ。

現状では微々たる成果で費用対効果が悪いのだが、これから領地を発展させるのだし将来への投資と考えれば悪い案でもないはずだ。

2つ目は輪栽式農業の導入である。

現状、デュステール領の耕作地は痩せており、作物の収量も他領のものより少なく、これによる食料輸入量増加はデュステール家の財政に容赦なく痛めつけている。

輪栽式農業は小麦、カブ、大麦、牧草という既に領民が育成の経験を持ち、栽培費用も極めて安価な作物を育てる事で導入できる。

残念ながら家畜はデュステール領にいないし、導入する財政的余裕も無いので諦めるが、牧草自体はそれほど手間がかからずに荒地でも育てる事ができる。

領民たちには今まで以上の労働を強いてしまって苦労をかける事になるが、そのぶん少ない労力で牧草を素にした堆肥が手に入り耕作地の改良が出来るはずだ。

まあ、財政的にはとても優しい改革案だが時間はかなりかかるはずだ。恐らく明確に効果が出始めるのは1年や2年先の話ではないだろう。

今のところ、我が家の財政で可能な改革はこの2つである。
僕はこの改革案の効果と費用、および万が一失敗した場合に発生するであろう問題点を父さんに説明した。
一応、朝食の場を借りて話をしているので、この場には母さんもいるが領地経営に関しては父さんと僕しか関わっていないので母さんは黙って食卓についている。というか興味深そうに僕の後ろに控えているサラを眺めていた。

「ほう、お前の言葉が全て真実ならば中々興味深い内容だな。

戸籍についてはゲルマニアの方でも既に実施している領地があると、耳にした事がある。我が領のような人口が小規模の領地では効果も小さいが、それでも食糧輸入費が削減できその案が実行可能な財源が確保できたのならば私は反対するつもりはない。

それと輪栽式農業か・・・失敗した場合の問題点である地力の過度の低下は心配する事はないだろう。幸い我が領の広さだけは誇れる。例え耕作地が使えなくとも、代わりの土地はいくらでもあるからな。

多少手間がかかるだろうが、その案が失敗したとしても我が領にとって大した打撃にはならないだろうし、そもそもこれ以上耕作地が痩せることなどないのでな。

2つの案とも私がすぐに取り掛かってやろう。その代わり、お前はその娘と共に財源の確保に努めよ」

父さんは僕の案に対する考えを言葉にしたうえで、了承してくれた。
そりゃあ僕だっていきなりリスクの高い改革をするつもりはない。
そんなものを提案したところで父さんは納得しないだろうし、失敗した時の反動も怖いしね。

僕が提案した改革案は小さな出費である程度の効果をもたらすものだ。よほどの頑固者でなければ了承するだろうことは予想できた。

その後は普段通りに朝食をとった。今までずっと黙っていたせいか母さんの言動がいつもより多かったのは、まあ、気にするほどでもない。

朝食を食べ終わった僕は、サラを連れて自分の部屋に戻った。昨日血と土で汚してしまったベッドのシーツは真新しいものに代えられていた。

僕は机に座り、先ほど了承してもらった改革案の詳細を羊皮紙に書き込む。

事前に詳細をまとめた書類を容易できれば良かったのだが、昨日は疲労のためすぐに眠ってしまったのがいけなかった。

僕の背後で暇を持て余しているサラが興味深げに僕の室内を眺めている中、僕はひたすら羊皮紙に文字を書き込み続けた。

3時間後にようやく改革案の詳細をまとめ終わった。サラはよほど暇だったのかベッドの上ですやすやと眠っている。

白いシーツの上で純白の長髪を持つ絶世の美女が眠っている姿はまるで一枚の絵画を見ているかのようだ。僕は前世の子供の頃読んだ御伽噺に出てきた眠り姫のように静かに、しかし心底安心しているような表情で眠っている妖精のごとき彼女を見てただこう想う・・・

君、メイドだろ?

それでいいのかい・・・

僕はサラを放って父さんに書類を提出しに向かった。
これが終わったら今日は休みだ。昨日精神力の大部分を使ってしまった以上、再び森の奥地に向かうのは2，3日後だろう。

「とりあえずサラを教育するかな」

僕の部屋を出る直前、ポツリと独り言をもらす。
彼女は礼儀云々以前に基本となる知識が足りない。このままでは彼女が苦労する事は目に見えているし、僕が彼女を保護すると決めた以上は必要な事は全て彼女に教えるつもりだ。

幸いしばらく財源確保以外の時間は暇になるしね。

デュステール領で改革の芽が芽生え始めて数週間が経過したある日の朝食時、僕は父さんからとある報告を受けた。

「汚職・・ですか」

僕が苦さに定評のあるハシバミ草のサラダをつつきながら返答すると、父さんは苦々しげな表情で頷いた。ハシバミ草は凄まじく苦いのだが、健康に良くなによりも安価なので我が家に限らずデュステール領の主要な食物の1つになっている。
産地は忌々しいセリューネ公爵領だ。

「ああ、戸籍調査の最中に判明したらしいのだが、いくつかの村の徴税官が故意に収穫量を少なく、輸入する食料の量を過剰に報告していたらしい。

散々私腹を肥やしおって腹立たしい事だ。不正が発覚したお蔭で今までの負担が減る事になるが、我らが苦労をしている間に彼奴らが甘い汁を吸っていたと想うと怒りが中々収まらん！」

父さんはそう言って荒々しく馬鹿みたいに固いパンを噛み千切った。まさか我が領のような極貧領地でも不正があったとは驚きだ。まあ、不正なんてどこにでもあると言う事か。しかし領主でさえも貧困に喘いでる中、不正をして私腹を肥やすとは・・・その度胸だけは大したものだ。

我が領は人口とは不釣合いなほど広大な面積を持つので、その分領主の目が行き届きにくい。確かに不正などやろうと思えば簡単に出来ただろう。・・・そんな余裕があるかどうかは別だがね。

今回の調査では領内の隅々にまで領主の目を向ける事になるから、今まで気づかなかった些細な事も分かるようになる。この事はまだまだ序の口で、次々と新たな不正が発覚するだろう。そうなると調査の遅滞は避けられない。まあ、時間はあるんだ。じっくりといこう。

僕は母さんと協力して父さんを宥めつつ、慣れ親しんだハシバミ草の苦さに顔をしかめるのであった。

改革の芽生え（後書き）

遂に領地改革が始まりましたね！

これからはガンガン行きますよ！！

・・・すいません嘘です。たぶんのっそり進むと思います。

吸血鬼と童帝

あの不正報告からおよそ半年が経過した。現在の進捗状況は、戸籍調査が全体の5分の1を完了した。

調査完了まではまだまだ時間がかかりそうだが、そろそろ調査している家臣団も仕事に慣れてきているだろう。

実際に作業速度は速くなってきているのでなんとか2年以内には完了できるかな？

不正に関しては元々我が領が貧乏だっただけあり、更正しても浮いた経費は１０００エキューにもならない微々たるものだった。

しかし塵も積もれば山となるという言葉通り、次々と発覚する大量の不正をまとめれば結構な額になる。

ここまで多くの不正があると僕も父さんも怒りを通り越して呆れの境地に達していた。

得られる利益なんて少ないのによくもまあ、危険を承知で不正なんてやるものだ。

輪栽式農業による農業の改善については今のところ大した効果は出てきていない。

まあ、半年足らずで効果が出るなどとは僕も父さんも思ってないので、この件については大して気にしていない。

そういえば不正発覚によって浮いた経費のおかげで、輪栽式農業の要となる地力回復のための牧草の種が予定量よりも多く購入できたようだ。

僕は余剰分の牧草を使用していない土地で育てる事による堆肥の取得量の増大を図った。

牧草の育成には手間がかからないので領民の負担は最小限で済むし、農作業の邪魔にもならないはずだ。

そんな小さな手間に対して得られる大量の堆肥という利益は見逃せない。

父さんも賛成してくれてすぐさま牧草の育成に取り掛かったようだ。

うまくいけば2，3年後の収量は増加できるかもしれない。

まあ、始めたばかりなので増加するとしても1割にも満たないだろうが。

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは自室の机に座りながら読んでいた改革の経過が書かれた書類から視線をはずし、窓の外を見た。

蒸し暑かった夏が過ぎようやく涼しい秋がハルケギニアにやってきたはずなのだが、今日の天気は快晴のようで夏の暑さがぶり返してきている。

窓の外から庭にある畑を眺めると、そろそろ収穫の時期が近づいていることもあり小麦が穂をつけて時折ふく風でなびいていた。

その穂は土地が痩せている事もあり、あまり実りが良いとはいえなさそうだ。

いつかは枝が大きく垂れるほど実らせたいものだなあ。

少しでも食費を賄うために領主館の庭で大々的に畑を作っているＴＨＥ　貧乏貴族　の事実から目を逸らしつつそんなことを思っていると、書類と筆記具しか置いてなかった僕の机に音も無くカップが置かれた。

中身は冷ましてある紅茶のようだ。

「アリスト様、少し休憩を挟まれてはいかがでしょうか」

カップを置いてくれた侍女、サラは僕を気遣うように声をかけてきた。

僕はチラリと部屋にかけてある時計を見る。

ふむ、確かに書類を見始めてかれこれ2，3時間は経っているし書類に一段落が着いたところで彼女の言うとおり休憩を挟むのも悪くはない。

「ああ、ありがとう。そうさせてもらうよ」

そう言ってカップに口をつけると水のトライアングルメイジである彼女が魔法で冷やしてくれたらしく、程よく冷えた紅茶がのどに染み渡る。

あー・・・暑い日は冷えているだけでどんなでも飲み物でも極上のワインに勝るとも劣らないものになるね。

紅茶を飲んで休憩している僕を見ながらサラは優しく微笑んでいる。

絶世の美女が淹れてくれた紅茶を飲みつつ、その時美女に見守られながら休憩する僕・・・

もしかして僕って勝ち組じゃね？

前世で散々嫉み、羨望し、憤怒し、呪殺してきた勝ち組という奴じゃないですかい！？

まだ童貞だけど！

元大魔法使いだけど！！

現童帝（わらべのみかど）だけど！！！

まあ、いいか。

僕は一瞬思考を支配しそうになった考えを捨て、穏やかにこちらを見つめるサラを眺めながら酷使していた脳を休ませるのであった。

「アリスト様、日々養って頂いている身で大変言い辛いのですが、折り入ってお願いがあるのです」

休憩中、サラがいきなりそんな事を言い出した。彼女は申し訳なさそうな表情で僕を見ている。

半年間彼女と共に過ごしてきて分かったのだが、彼女はとても真面目で誠実な女性だ。

命の恩人に、仕事をしているとはいえ衣食住を保障してもらっている現状、僕に頼みごとをするのは彼女にとって回避したい事だったのだろう。

その表情からは苦悩が見て取れる。

「どうしたんだい？
とりあえず遠慮せずに言ってごらん」

僕は努めて優しい表情で彼女の言葉を促す。彼女の生活を保障すると言った以上、彼女に不自由な思いをさせるわけにはいかない。

いや、貧乏な時点で不自由な思いをさせているとは思うけどね！！

「はい・・実は半年前にアリスト様に私が救われて以来血を全く口

にしていないのでアリスト様の血を分けて頂きたいのです」

・・・・・・えっ？

お嬢さん、血ですかい？

あの後、当初こそ混乱状態にあった僕だが、何とかサラの事情を把握できた。

サラ・・・というかサラの両親も含めた家族全員が定期的に血液を摂取していたらしく、それを怠ると身体能力が衰え体に様々な障害が発生するらしい。

なんだよそれ、完全に吸血鬼だろ。

森の中にいた時は、サラたちに好意的な森に住む翼人の女性から血液を貰っていたらしい。

父親は男性から貰っていたようだ。

翼人すか？

あの森に翼人が住んでいたなんておじさん知らなかったよ。

そこはかとない面倒事の香りがしますよ？
というか話を聞く限り同姓からしか吸血できないんじゃないのか？

サラが同姓からしか吸血しないのはむさい男の血は生理的に無理だからだそうだ。父親の場合は母親が強制的に男の血を飲ませていたらしい。
だが僕の場合は子供だし、自分の主だから大丈夫らしい。

生理的に無理とか言うなよ。同じ男として悲しくなる。
というか君、ショタコンだったのかい？

「うん、君の事情は分かったよ。そういうことなら了解した。僕の血を飲むと良い。

ただ、君が吸血鬼だと言う事は僕以外の誰にも言わない事。分かったね？」

僕がそう言うと彼女は嬉しそうに了承の意を僕に伝えた後、僕の首筋に噛み付いた。

痛かったです。

彼女に血を与えた後は急激な失血による眩暈（めまい）を感じたが、気にする程度でもなかった。

僕にとっては失血よりも森に翼人が住んでいたという事の方が眩暈を感じるよ。
ああ・・・父さんになんて言おうかな？

サラに翼人の詳細を尋ねると、快く教えてくれた。彼女は血を飲

んだせいかなんだか気分が高揚しているようだ。今は酔っ払い親父と似たような雰囲気だ。

翼人たちは全部で８００人ほどの規模らしく、ゲルマニアとの国境に近い場所で生活しているようだ。

確かゲルマニア側の領主はザクセン辺境伯だったはず、領地の広さは我が家と同等程度で領民は我が家の6倍ほど・・・３０万人程度だった気がする。

翼人たちは元々の住処を７０年ほど前、そのザクセン辺境伯に奪われたので森の中に住処を移したらしい。森の中で作物を育てたり、木の実を収穫したり野生動物などの狩をしながら暮らしているようだ。

・・・ふむ、８００人か。

もしも翼人たちをうまく支配下に出来れば、森の奥地に群生する貴重な植物を大量に、尚且つ恒常的に収穫できるルートが手に入る。

彼らに貴重な植物の育成をしてもらえれば、森林資源の枯渇に怯える心配もない。

彼らは元々の住処を追われたから、わざわざ住みづらい森の中に住んでいるんだ。

彼らの意識の根底には７０年前、ザクセン候に住処を追われた恐怖があるはずだからそれを突いてやり、こちらが甘い餌を用意すれば案外簡単になびくかもしれない。

餌は翼人の住処を領内の森の外に移す事と彼らの保護だな。幸い広さだけが取り柄の我が領なら、住む場所に困る事はないだろうし、耕作地を森の中から移してきても広大な我が領はそれを意図も簡単に受け入れる事ができる。

運が良いことに、凄まじく貧乏でエルフに対する防壁である我が領にはブリミル教の教会は存在しない。
利益主義の奴らは何の利益ももたらさないどころか、エルフの脅威があるデュステール領には近づこうともしない。

まあ、エルフとの聖戦になった時、真っ先に聖戦の元凶たる教会はエルフたちに狙われるだろうから当たり前と言えば当たり前だな。
例えこんな場所に教会を造ったとしても、司教なんて誰もなりたがらないだろう。

そのお蔭で領民たちはブリミル教なんて全く信じていないので、翼人が安全な種族である事を教えればすんなり受け入れるだろう。
というか、過疎状態のデュステール領では違う集落とは交流する気が無ければ存在すら知らないほど、人々の移動が少ない。

翼人が反乱でも起こさない限り我が領が彼らを拒絶することはないだろう。

いや、むしろこの際ハルケギニアに存在する全ての翼人の保護を約束してしまっても良いかもしれない。
彼らは先住魔法を操り、自力で飛行できる優秀な労働力だ。ただ領内に住む事を了承しただけで彼らを配下に出来るのならば、それはとても魅力的だ。

問題点として、彼らを集めると結束して反乱を起こされかねないところだが、領内に住処を分散させたり段階的に人間の集落に混ぜていけば結束する確立は低くなる。

まあ、今こんな事を考えても取らぬ狸の皮算用だ。早速今夜の夕

食の席で父さんに提案して見よう。
うまくいけば、効果はでかいが諸々の事情で提案できなかった改革案の足がかりになるかもしれない。

なんだか気分が高まってきましたよ！？

なんだか興奮してきた僕は無駄にテンションが高いサラと一緒に外に出て年甲斐も無くはしゃぎまわった。

アリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステール、前世での名は橋本渉、職業研究員、享年４２歳。
前世も含めて５０歳になる、ある日の午後、庭でメイドと奇声を発しながら騒ぐ今日この頃。

翼人との交渉

翼人の存在を知ってから数日、ようやく父さんを説得できた僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールはサラを連れて森の上空をフライで飛行していた。
翼人達の保護で父さんを説得するのには骨が折れた。

翼人はエルフとは比べ物にならないが、それでも人間からは嫌悪感情を抱かれている。
領内に教会が存在しないのでブリミル教なぞ内心では全く信仰していない父さんだが、翼人たちを領内に堂々と居住させる事による貴族社会と教会からの嫌悪感情を恐れていたようだ。

しかし元々王宮での影響力は領地を持たない底辺の騎士階級と同等かそれ以下である名門侯爵家のデュステール家にとっては、そんなもの痛くも痒くもない。
王宮から出ている補助金は国防上不可欠なものなので削減される心配はないし、デュステール領に食糧を輸出している他領主達にとっても、わざわざ定期的に入ってくる高収入を捨てることはしないはずだ。

もしも我が領に対する輸出を停止すれば、我らだけでなく大量の行き場を失った食料を抱える事になる彼らも大いに困る事になる。
教会は辺境で危険地帯であり貧乏な我が領には今と変わらず目を向ける事すらしないだろう。
翼人を保護する事に対する貴族社会や教会からの被害なんて実質的に無いのと同じである。

そもそも行商人すら来ない辺境である我が領には、聖戦が起こらな

い限り外から目を向けられる事はない。
精々が食糧を輸入する時に数百名の人間が領主館のある町という名の村に来るだけだ。
翼人たちの住居の場所さえ注意を払えば外部に知られる事はないだろう。

父さんに翼人を保護した場合の利益と問題点をこと細かに説明して、問題点が翼人の反乱防止に注意をするだけだということをようやく納得してもらえた。
やっとの事で父さんに了承してもらい、制限付だが交渉の全権を任された僕は翼人との橋渡し役を頼んだサラと共に彼らが住む森の奥地へと向かっているのだ。

父さんは僕たちに護衛をつけると渋っていたのだが、翼人の住居を往復するだけでスクウェアでないメイジは精神力の大半を使用してしまい大した戦闘力を持たないので断った。
それに自分で言うのもなんだが、スクウェアメイジである僕とサラはデュステール家の最高戦力である。

貴重な草木の採取も最近は僕だけで行っていたし、護衛をつけることにあまり意味を感じられない。
そんな訳で僕はサラと2人だけで向かっているのだ。

サラの道案内で見つけることができた翼人の住居は、僕がいつも草木の採取をしている場所から4，５０ｋｍほどゲルマニアよりの場所に存在した。
３０ｍを越す木々の上に建造された彼らの家々は、上空からの発見を阻害する為に草木によって周囲の景色に擬態していた。

周到に擬態しているため注意して見ないと見過ごしてしまいそうだ。
サラの案内が無ければ見つける事は困難を極めただろう。
僕たちは集落から少し離れた場所に着地し、そこから歩いて向かった。
いきなり集落のど真ん中に降り立ってわざわざ彼らを刺激するのは危険が高い。

僕とサラが集落に到着すると、地上で大麦らしき作物が栽培されている畑の世話をしていた翼人の女性が駆け寄ってきた。

「マリール！！」

女性に気づいたサラは手を振りながら女性の名前を呼んだ。喜色に染まったサラの表情を見る限り友人なのだろうか？
女性もサラの名を呼んだと思いきや、駆け寄ってきたそのままの勢いでサラに抱きついた。

吸血鬼らしく優れた筋力を持つサラでも流石に成人女性の強烈なタックルは受け止め切れなかったらしい。
サラは女性に押し倒されるような形で地面に背中から倒れた。
幸い地面には背の低い草が大量に生えており、それらが倒れた衝撃を吸収してくれたようで、サラの表情には驚愕の色こそあるものの苦痛の色はない。

サラは暫くぶりに会った知り合いによるタックルに動揺しつつも、上半身を起こして何故か声を上げて泣いている翼人の女性に話しかけた。

「ちょっとマリール、久しぶりに会ったのにいきなり人を押し倒し

て更には大泣きするなんてどうしたの？

もしかして暫く会わない間に何かあったの？」

サラは女性の頭をあやす様に撫でつつ話しかけるが、女性はただ泣くばかりで話が出来る様子ではない。

結局、騒ぎを聞きつけた他の翼人が来るまでサラは彼女に泣きつかれているままだった。

えっ、僕かい？

僕は場の空気を読んだので存在が空気になってましたよ。

ふふ・・・我ながらうまい事を言ったと思うんだがどうかね？

どうやら集落ではサラは死んだと思われていたらしい。

まあ、家は壊れ2人分の人の死体と大量のオークの死体があり、半年以上消息を断っていたのだからそう思われても仕方のない状況だ。

翼人の女性を泣き止ませたり、僕が人間だと気づいて騒ぎになりかけたりと様々なハプニングが発生したが、幸いサラのお蔭でなんとか集落の長と交渉の席が持てた。

僕は他の家となんら変わらない一軒の家に案内され椅子に座っている。

目の前にいる白髪混じりの赤髪を持った老人がこの集落の長であり、先ほどから僕の後ろで立っているサラに対しては深い慈しみが籠められた視線を向けているが、打って変わって僕には値踏みするかのようにジロジロと無遠慮な視線を向けている。

一応、見た目は１０歳にも満たない子供なんだしそこまで露骨な態度は取るなよ、と言いたい。

僕は出された飲み物をほんの少し口に含んだあと、交渉を始めた。

「私はこの森を領地に持つガリア王国の貴族、デュステール侯爵家が嫡男アリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールだ。

今回は突然の訪問に関わらず交渉の席を設けて頂き感謝する」

僕が始めの挨拶を言うと、老人も交渉の体制に入ったのか多くの経験を感じさせる不敵な笑みを浮かべつつ口を開く。

「ご丁寧な挨拶痛み入ります。私はこの集落の代表をやっているクルムです。

本日はこのような場所にわざわざ足を運ばれるとは、一体どういった御了見ですかな？」

クルムと名乗った老人の眼光に鋭さが増した。その眼光からは老人の強い意志が感じ取れる。

もしこの場で僕が７０年以上前に翼人たちを追放したゲルマニア貴族と同じ判断をするのならば、争いも辞さないという意志がヒシヒシと伝わってくる。

正に追い詰められた者の眼光だが、恐らくこの森は人間達から迫害を受け続けてきた彼らにとって最後の住処なのだろう。

実際にこの森から追放されれば彼らに待っているのは砂漠という不

毛の大地であり、そこでの生活はエルフのように高い技術力と巨大な労働力を持たない限り厳しいものとなる。

「ははは、クルム殿が心配なされている様なことではないので安心して欲しい。
私は貴方たちと争いに来たわけではない。ただ提案をしに来ただけだ」

「提案、ですかな？」

僕の言葉を聞き、眼光の鋭さはやや緩んだが、今度は表情に疑問と不安の色が浮かんでいる。
クルムはまるで助けを求めるかのようにサラの方をチラチラと見るが、あの娘はいくら親しいからと言っても主人の交渉相手に情報を与えるほど分別を持たない娘ではない。
彼がいくらサラを見ようとも何も起こりはしないだろう。僕は構わず話を続ける。

「ええ、領主たるデュステール家に税金を納めて頂くことはもちろんですが、我々はこの森の奥地に存在する植物たちに一定の価値を見出している。
しかし採取手段が限られているお蔭で安定的かつ大量の採取が難しい状況なのだ。
更にはいずれ植物を採り尽くしてしまい、森林資源の枯渇も恐れている。

そこで貴方たちに我々が指定した植物を採取し森の外まで運んで欲しい。
それと並行して植物が枯渇しないように君達の手で栽培して欲しいのだ」

老人は驚きでわずかに目を見開いていた。この驚きはこちらの要求が軽い事でなのか重い事でなのか判断がつかないな・・・・・・

「なるほど、そちらの要求は分かりました。
その要求に従っている限り我らはこの森で生活する事が認められるということでよろしいのですかな？」

おお！　どうやらこの老人はこちらの一方的な要求に対してこの森に住むことを認めるだけで了承するらしい。
すばらしいね。

だが、それではいかんのだよ。そんな事ではデュステール家は高々年間数万エキュー程度の利益で満足してしまう。
そうなってしまってはもっと高みを目指せないし、今後の領地育成計画にも支障をきたしてしまう。

「いえ、それではこちらばかり利益が出て些か不公平になってしまう」

老人が再び驚きで目を見開く。先ほどよりも見開いた目が大きい事から、その驚きの度合いが分かる。
まるで今までずっと軟派なチャラ男だと思っていた奴が実は『年齢＝彼女いない暦』の童貞だったと判明した時の大賢者殿のようだ。

そういえばあの時の童帝陛下は、初めから判っていたかのようにただ頷いていただけだった。
今では自分も童帝となったが、あの時の陛下のように自信と誇りに満ち溢れ、毅然としているだろうか・・・

僕はチラリと後ろに佇むサラを見る。
彼女はずっと僕を見ていた。その瞳には親愛や信頼、そして焦れるかのような憧れが伺えた。

それはかつて僕が・・いや、僕たちが陛下やその右腕たる大賢者殿に向けていたものと同じだった。
どうやら彼女の前では僕は童帝として足り得る存在らしい。
こんなにも僕を慕ってくれる臣下の前で、情けない姿は見せられないよな！

「デュステール家はこの集落はもちろん今後、我が領の領民になることを選択した全ての翼人を保護する事を約束しよう」

従者の思考と交渉の結末

「ははは、クルム殿が心配なされている様なことではないので安心して欲しい。
私は貴方たちと争いに来たわけではない。ただ提案をしに来ただけだ」

丸太をそのまま活用した粗末な椅子に座りアリスト様はそう仰った。
アリスト様の言葉を聞いた翼人達の代表者、クルムさんは訳が分からないといった風な困惑の表情を浮かべている。

クルムさんにしてみれば、人間は自分たち翼人の排斥を当然としている。
そんな人間が翼人に対し領地から追放するのではなく提案を持ちかけてきたのだからクルムさんが驚くのも無理はないと思う。

「提案、ですかな？」

クルムさんが疑問の言葉を声にした。
そしてチラチラとアリスト様の後ろに控えている私に視線を送る。
交渉の場で有益な情報を持たない彼は恐らく私に何らかの反応を求めているのだろう。

クルムさんには今までお世話になったので助けてあげたいところだが、今の私はアリスト様の従者という立場にいる。
主の交渉相手であるクルムさんを私情で助けるわけにはいかない。

私は申し訳ない気持ちを抑えて、そっとクルムさんから視線を外した。

私から何も引き出せず、クルムさんが困惑したままでもアリスト様との話は止まらない。

「ええ、領主たるデュステール家に税金を納めて頂くことはもちろんですが、我々はこの森の奥地に存在する植物たちに一定の価値を見出している。
しかし採取手段が限られているお蔭で安定的かつ大量の採取が難しい状況なのだ。
更にはいずれ植物を採り尽くしてしまい、森林資源の枯渇も恐れている。

そこで貴方たちに我々が指定した植物を採取し森の外まで運んで欲しい。
それと並行して植物が枯渇しないように君達の手で栽培して欲しいのだ」

アリスト様の要求を聞いたクルムさんは驚きでわずかに目を見開く。
クルムさんは人間の出してくる要求はもっと突飛なものだと思ったのだろう。

クルムさんから昔聞いた話だが、人間が翼人を排斥せずに管理下におく場合は使い捨ての道具として扱うようで、翼人達の生存を無視した要求を言ってくるそうだ。
しかしアリスト様の要求は翼人たちにある程度負担がかかるし、恒久的なものだが決して翼人達の人口を消耗させるほど過酷なものではなかった。

今まで人間に排除すべき厄介者として扱われてきた翼人のクルムさんが驚くには十分だろう。
クルムさんの表情は困惑の色がだいぶ薄れ、微かに希望が見えた。

「なるほど、そちらの要求は分かりました。
その要求に従っている限り我らはこの森で生活する事が認められるということでよろしいのですかな？」

「いえ、それではこちらばかり利益が出て些か不公平になってしまう」

クルムさんは交渉が始まった時と比べて明るい表情で交渉をまとめようとしたが、アリスト様の言葉でクルムさんの目がまた驚きで見開いた。
私も予想外の発言につい驚いてしまう。

半年ほどアリスト様と共に生活しているが、彼は優しいけれど得られる利益は根こそぎ吸い取る方だと思っていた。
決して必要でもないのに自分の持っている利益を相手に分けるようなことはしないはずだ。

私が戸惑っていると、アリスト様は顔の向きをずらしチラリとこちらに視線を向けた。
一見、その瞳からは何も読み取れず底知れない恐怖を抱くが、良く見るとほんのりと彼の優しさが感じ取れる。

１０歳にも満たない少年のものとは思えないほどの理性が秘められた彼の碧眼に私は思わず見入ってしまった。
その瞳を見るだけで根拠のない安心感を抱いてしまう・・・・・・

アリスト様は今、どのような事を考えているんだろう。
私を見つめる彼の瞳からは何も知る事はできないが、この聡明な主の事だ・・きっと私では到底理解できないようなことを考えている

んだろうな。

そしてそれまで感情の色が薄かった彼の瞳に突然明確な意思が現れた。

彼は私から視線を外し、顔を元の位置に戻した。

「デュステール家は・・・この集落はもちろん今後、我が領の領民になることを選択した全ての翼人を保護する事を約束しよう」

アリスト様の言葉を聞いた瞬間、私は大きな驚きを感じると共に目の前の小さな主が持つ底知れない器を確かに感じ取れた。

「ふぅ、疲れた」

僕は自室のベッドに体を投げ出しつつ呟いた。

翼人との交渉は予め(あらかじ)僕が想定していたよりも遥かに好意的に受け止められた形で終わった。

僕の要求は全て受諾され、僕が彼らを保護するという提案は交渉相手の老人が涙を流すほど喜んでいた。

老人は早速デュステール家が翼人を保護するという情報を他の翼人の集落に伝えると言っていたので、我が領の翼人人口は加速度的に増加する事だろう。

老人は『我らが出来る事ならば全身全霊を持って応えよう』と言っ

てくれたので、翼人というハルケギニアでも屈指の移動力を持った労働力が、想定した中でも最高の条件で手に入った。

これからは領地整備においてもある程度手を出すことが出来るようになるだろう。
領地整備において目下の課題はゲルマニアとの交易線の確保だ。
現在、全ての交易相手が怨敵であるセリューネ公爵家の派閥である。

これでは自給できないデュステール家の命綱は彼奴らが握っているも同然で、デュステール家にとっては面白くない状況だ。
このままではデュステール家がセリューネ家の傘下になるのは時間の問題であり、数年後には僕が公爵家の４女と結婚する事で派閥に組み込まれる事になっている。

それを防ぐためには食糧生産を増加させて自給可能になると共にセリューネ家の派閥を通過せず、尚且つ輸送費が高騰しない交易ラインを確保するしかない。
今までは亜人が盛り沢山でデュステール家の財力と軍事力では開拓できなかった巨大な森と３０００ｍ級の山脈が邪魔だったので、ゲルマニアとの交易線は確保できなかった。

しかし飛行可能な労働力を手に入れた今、森は無理だが、山脈にならば街道を造ることが可能なのだ。
人間では険しい山道を登り命の危険を伴う山肌での作業だが、翼人にとっては少し面倒なだけの作業になる。

まあ、翼人の数は今のところ８００人程度しかいないので作業は遅々として進まないだろうが、幸い制限時間である僕の結婚までには時間があるんだ。
金さえかからないならば、僕はゲルマニアとの街道の建設を推し進

めよう。

今の時間はすでに２２時を過ぎている。
父さんに街道建設の話をするのは明日の朝食の時にでもしようかな。
お金は最低限しかかからないし、新たに税収も増えたので父さんも了承してくれるだろう。

僕は明日どうやって父さんに説明するか考えながら、襲ってくる睡魔に身を任せ意識を失った。

春の陽気と穏やかな散歩

僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは9歳になった。
翼人との交渉から既に半年が経ち、度重なる改革により慌しかったデュステール家の雰囲気も大分落ち着いてきた。
改革前、耕作地以外は荒れた土地だった領内は、牧草が生い茂るただの草原にまで回復した。

牧草による堆肥で地力が回復したお蔭なのか、作物の実り具合も改革前に比べて良くなりかけている気がしないでもない。
何分、農地改革から1年しか経っていないので僕にはあまり違いが良く分からなかった。

戸籍調査の方はようやく領民の半数が完了した。
不正の報告は相変わらず止まる様子を見せない。
恐らく集落同士の交流が無さ過ぎるせいで、各集落の役人同士の連絡を取っていないのだろう。
この事実は領内の物流や人の移動が如何に寂れているか分かるのだが、今はありがたいと思っておこう。

そうそう、森に住んでいた翼人たちだが、やはりあのまま森に住み続けるのは辛いらしく、森の近くに集落の一部を移動した。
どうやら段階的に移動するらしいが、今年中には集落全体が森から出て行くことができるだろう。

我が領に来る領外の人間は食料の輸入以外悲しい事に存在しないので、幸い翼人達のことは領外には知られていない。
知られたところで影響は何も出ないと思うが、現状はまだ他領との

関係に波を立たせたくはない。

僕は9歳になってから父さんに押し付けられた書類仕事をこなしつつ、窓から入る春特有の穏やかな日差しで感じる眠気と泥沼の戦いを繰り広げる。
戦況は、サラが入れてくれた渋い紅茶によりなんとか戦線を支えている状態だ。

今はフェオの月、エオローの週、ダエグの曜日だ。
地球の暦に直すと4月24日になる。
前世ではまだ寒さが少し残っていた時期だが、砂漠に近いデュステール領では5月中旬の陽気だ。
思わず気が緩んでしまう。

「・・・・・・ぅおう」

一瞬の気の緩みで戦線が崩壊しかけるが、手遅れになる前に立て直す。
残り4枚の書類を片付ければ、この戦いは終わるんだ。
頑張ろう。
僕は半分ほど残っていた紅茶を一気に飲み干して仕事に取り掛かった。

苦労の末に書類を全て片付け2時間ほど惰眠を貪った僕は、夕食まで大分時間があるのでサラを連れて散歩をすることにした。

我が家にある本を読みつくし、魔法に関してもあまり伸びなくなった僕の暇つぶしは散歩くらいしかない。

自室を出て無駄に長い廊下を歩く。
規模こそ名門侯爵家の名に相応しい我が家だが、装飾や置物などは全く置いていない。
１つの絵も飾っていない廊下の白い壁や高価な置物どころか花瓶すらなく障害物が存在しない広々とした廊下は、見る者に寂しさや物足りなさを惜しみなく与える。

「我が家の廊下は何年も見ているが、広々として歩きやすいと常々思っているんだよ。
サラ、君もそう思うだろ？」

ＨＡＨＡＨＡと笑いながら僕はブラックジョークをかます。

「はい、私もアリスト様と同じ考えです。
それに例え装飾が施されていたとしてもそれら全ては、アリスト様の輝きの前ではただの障害物でしかありませんからね」

言葉だけを聞くなら、僕のジョークに対しサラもジョークで返したと思うだろう。
もしそうなら僕はここでＨＡＨＡＨＡ！！と快活に笑うところなのだが、彼女の目は本気であり、口調も笑いを誘うようなものではなかった。

「ははははっ」

僕の口からは乾いた笑いしか出ない。
サラが先ほどのようにことあるごとに僕をワッショイし始めたのは

翼人との交渉が終わってからだったと思う。
あの日を境にサラの僕に対する忠誠心が跳ね上がった気がする。

僕の部屋があった2階から階段を使って1階に降りつつ、忠誠心が上昇した原因を考えるが階段から降りた時にはどうでも良くなった。
正面玄関から外に出ると、もはや外聞を気にして隠そうとする意思など微塵も感じられない広大な畑が広がっている。

今はちょうどカブの収穫時期であり、庭と言う名の畑でも手隙の侍女や兵士たちが収穫作業を行っている。
畑の脇道を歩いていると僕に気づいた人たちから何度か声をかけられ、その度に子供らしい愛想笑いを返しておいた。

サラはというと、密やかな想いを秘めているのであろう若い兵士たちからチラチラと視線を向けられ、少し鬱陶しそうだ。
まあ、サラほどの美人を気になってしまう男性諸君の気持ちは分かるが、次期領主である僕よりもそちらに気を向けるのはどうかと思う。

それから2，３０分ほど歩いているとようやく畑を抜けた。
歳入の半分を軍事費に費やしているだけあり、そこからは一気に軍事色が強くなる。
竜を飼育している巨大な竜舎が２棟建っており、そこにはデュステール家が保有する全ての風竜２０頭がいる。
竜は飼うだけでも膨大な食費を消費し、さらに竜に装着する個体ごとに専用の鎧を用意せねばならず、フネに次ぐ金食い虫だ。

竜舎の他にも、近くを流れる川から水を引いてきて造った人口の巨大な湖には１０隻のフネが停泊していた。
小規模な都市国家ならば単独で制圧できそうなあの艦隊が、デュス

テール家が保有する全艦艇である。

文句なしでデュステール軍最大の金食い虫である艦隊は、独特の威圧感を放っており見ているだけで心が沸き立つ。

しかしデュステール家の財務を把握しているものとしては、誇らしさと憎たらしさ、その他諸々が混ぜ合わさった複雑な感情になる。

「いつ見ても艦隊は立派だねぇ」

「はい、あの艦隊が空を飛んでいるところなど圧巻でしょうね私は生まれてからほとんどの時間を森で過ごしたので、フネを知った今でもあれが飛ぶ光景など想像もできません」

そっかぁ、我が領の風石採掘量が現状の3倍になればもしかしたら見れるかもしれないね。

キラキラと瞳を輝かせ、期待を膨らませた子供のような様子で艦隊を見つめる彼女にそんなこと言える訳もなく、僕は無難な返答で場を濁した。

確かサラは今年で２４歳だったはずだよね?

普通立場が逆だと思うのは僕だけだろうか。

しかし艦隊も凄いが、湖自体も僕は気に入っている。

確か9回くらい前の聖戦で艦隊の停泊地として建造されたあの人工湖は、聖戦の度に拡大をされて今の大きさになったのは3回前の聖戦の時だそうだ。

その湖は停泊地を使用目的とした人工湖だけあり、岸が全て整えられており風情の欠片もない。

だが、そこが良い!

そんな人工湖の近くに寂れた巨大な建物がある。
あそこは造船所で、聖戦時は数百隻にもおよぶフネの修理や整備をし、新造艦の建造も行っていたそうだ。
今はそんな気配すらなく、年に数回ある艦隊の整備以外には利用されていない。

人工湖の近くは造船所の他にも剣などの整備製造を行う鍛冶場や兵士たちが生活している兵舎が存在している。
鍛冶場ではデュステール家で使われる剣や槍などの武器が作成されており、ある程度はそれらを他領に売っている。

希少植物を採取する以前は、それら武器が我が領の主要輸出品だった。
まあ、それで得た利益も食料購入費に飲み込まれるんだけどね。
鍛冶場では銃も作れるのでゲルマニアのものには勝てないが、それなりの技術力は持っているのだろう。

デュステール家は領内に一通りの軍事施設が揃っており、ある程度の技術力を持っている。
資金さえあれば、市場でもある程度は太刀打ちできるようになるだろう。

僕は今後の構想を考えながら歩いていると、いつの間にか道からそれていたようだ。
道と言っても、少し手入れがされている程度で、他とあまり変わらないので気がつかなかった。
別に散歩なんだしこのままでも構わないだろう。

僕は見渡す限りの牧草を眺めながら歩を進めた。
なんだか最近、畑以外はあらゆる場所に牧草が植えてある気がする。

まさか全てを畑にするつもりはないだろうが、植えた人たちは一体どういった意図で植えているんだろう？

もしかしたら領内全てを畑にすることを目指しているのだろうか。
まあいいや。気にするほどでもない。
大変な事になるわけでもないし、牧草で地力が回復してくれるのは単純にありがたいだけだ。

いつか財政に余裕が出来たら牛や羊を買って畜産とかもやりたいなぁ。
そうすれば領内に新たな産業が芽生えるし、その結果財政も少しはマシになるだろう。
今は少しずつしか歳入は増えず、その分改革も小さなものに限られてしまう。
あと何年たてば大規模な領地改革に取り掛かれるのだろうか。

「アリスト様、そろそろ時間では？」

僕が物思いに耽っているとサラが時間を知らせてきた。
太陽も少し暗くなってきたので、そろそろ帰らなければ夕食に遅れてしまうかもしれない。
もしそうなったら母さんに怒られてしまい、それだけはなんとしても避けたい。
僕は踵（きびす）を返し、屋敷へと戻るのだった。

仇敵との婚約（前書き）

再び投稿が遅れてしまいすみませんでした。

私生活が忙しかったんです。

はい、言い訳ですね、すみません。

でも今回は1ヶ月くらいしか間が空いてませんよね？

はい、五十歩百歩ですね、すみません。

感想はとても嬉しいです。

励みになっています。

仇敵との婚約

「どうしたんだアリスト、表情が引きつっているぞ」

やあ、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールだ。数ヶ月前に年が１０歳になった。

「まあ、気持ちは分かるがな。日ごろから家では質素なものを食べていると豪華なものを目の前にした時、つい気後れしてしまうのは仕方の無い事だ。

しかしお前がスクウェアになってからは、このような場に出る事なぞ両手の指で数え切れぬほどあっただろう。
なぜ今日はそれほど緊張しているのだ？」

領地改革の方は今年になってようやく戸籍作成が完了した。その結果、驚いた事に領内の人口が調査前よりも８０００人ほど増加した５８０００人だったことが分かったのだ。
まあ、その分作物の収量も増加したので出費が増える事にはならなかった。

結果的に戸籍調査の利益は汚職の取り締まりで浮いた金額だけであったが、それでも領内の事を正確に把握できるのは今後の領地改革において最も重要な要素になる。
父さんは人口増加分だけ税金徴収額を増やそうとしていたが、それは止めさせた。

８０００人分の徴税を免れている現状ですら毎日を何とか食い繋いでいる状況なんだ。

これ以上民衆からの徴税額を増加させれば、デュステール領に領民が存在しなくなるだろう。
父さんも僕の説明を聞いて何とか納得してくれた。

「・・・・・もしやまだ怒っているのか？」

翼人達は集落の移動を完了させて森の傍で暮らしている。
森だけに亜人が盛り沢山の危険な森の傍には元々人間の集落は無く、領民たちは近寄ろうともしなかったので、翼人の存在は領民ですら未だ気づいていない。

山脈に造らせている街道は完成の見通しが全く立っていないが、希少植物の栽培は順調そのもので、収穫量を維持するどころか増加する勢いだ。
現在は希少作物で得た利益の一部を投資して、収穫量増加計画を立てている。

「確かに今まで黙っていた事は悪かったと思っている。しかしお前も貴族なのだ。

馬車の中ではあれほど落ち着いていたのに、何故ここにきてそれほど頑なになっているのだ！」

農地改革はまだ目立った効果が表れてない。これに関しては2年足らずの改革で効果が出るものでもないので、地道に土地改良を続けている。

兵士に改革の効果について聞いてみたところ、『改革前に比べて今年の実り具合は良くなっていると言われれば、微妙に良くなっているような気がしないでもないと思います』と言うような答えが返っ

てきた。

ついでにこの兵士は一日の内、武器を持っている時間より鍬を持っている時間の方が１００倍以上長いというデュステール家領内軍では平均的な兵士である。

中には『ここ数年は武器を持っていません』『えっ、この鍬って正式装備ではないんですか！？』という兵も存在する。

そうそう、最近――

「アリストよ、いい加減私の言葉に答えてくれ。

・・・・・すでにこの縁談は無かった事にできんのだ。ここまできてお前は何を考えている？」

「現実逃避です」

改めまして――――――僕、アリストことアリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールは１０歳になった。

現在、仇敵であるセリューネ公爵家主催のパーティーに出席している。どうやら公爵家四女の誕生パーティー兼婚約パーティーらしい。

・・・・・うん、僕との婚約パーティーだね。

「――――いやはやデュステール侯爵、アリスト殿、今回は婚約おめでとうございます。
それでは私はこれで」

そう言って僕と父さんの前から離れたのはセリューネ公爵派の主要貴族が一角、トレイブ伯爵家の当主だ。
でっぷりと肥えた腹部を持つ彼はテーブルの上に並べてある豪華な肉料理をとてもおいしそうに食べ始めていた。ご飯を食べている時の彼は本当に幸せそうだ。

「ははは、トレイブ伯爵は相変わらず食事に目が無いようだ。
デュステール侯爵にアリスト殿、彼のあれはいつものことなのでどうかお気になさらず」

伯爵の行動を見て同じくセリューネ公爵派の主要貴族の1つであるリュネ子爵家の当主が苦笑いしながら僕達に話しかけた。

「なるほど。
そういうことならば私は気にするまい」

「確かに・・・トレイブ伯爵の食事を見ていると私では思わず胸焼けをしてしまいます。

伯爵が今日食べる食事は私の一週間分の食事量を超えてしまうのではないのでしょうか？」

父さんが無難な答えを返し、僕がうまくもないジョークを言うと僕達の周囲にいた人達が一斉に笑った。
僕と父さん以外は皆、セリューネ公爵派の貴族たちだ。彼らだけではない。このパーティー会場にいる数十人の貴族たちは皆がセリューネ公爵派の貴族の当主達である。

僕はあらためてセリューネ公爵家の権勢を思い知った。
ついでに先ほどのジョークは我が家の貧相な食卓では実現してしまうのは悲しい現実だ。

僕と父さんが暫く入れ代わり立ち代りでやってくるセリューネ派の貴族たちと話していると、会場の出入り口付近がにわかに騒がしくなった。

ようやく主役のお出ましかな?

思えば今まで散々目の敵にしてきたが、セリューネ公爵と会うのはこれが初めてになる。さて、僕の童貞道を阻まんとするのは一体どんな若造かな・・・!?

自分の口角が釣りあがるのを感じていると、なにやら僕の服を掴む感触があった。

感触のあった腕を見てみると、服の端を可愛らしく摘む手がある。

僕はその手が伸びている先を見ると・・・・・・

「ア、アリストよ・・・私はなんだか緊張してきたぞ」

父さんが恥ずかしそうにそう言った。僕の服の端を摘みながら。

なんだろう・・別に父さんが悪い事をしている訳じゃないのに・・・
無性に父さんを殴りたくなった。
というかいい年をした大の大人が緊張したからって１０歳児の服を掴むなよ。普通逆だろ。

僕が父さんをじとじとした目で睨み、父さんが僕の服を摘みながらオロオロしていると奴はやってきた。

「遅れてしまって申し訳ない。
私はセリューネ公爵家当主、モリエール・ラ・プイサンス・ド・セリューネだ。
こうして会うのは初めてになりますなデュステール侯爵、そしてアリスト殿」

ガリア王家の血を引いている事を示すやや薄い青髪、服の上からでも分かる程よく筋肉がついた肉体、そして一度見たら忘れる事ができないほどのカリスマを秘めた眼光。
セリューネ公爵は僕の想像を超えた傑物だった。
彼の後ろに小さな子供が隠れているようだが、そんな事よりも僕は公爵への警戒に集中した。

「気にしないで欲しい公爵。中々に楽しい時間を過ごさせて貰っている」

父さんは僕の服から手をサッと離して対応した。
一見、しっかりとした態度に見えるが、後ろに隠した手が小刻みにプルプルと震えているのが僕からは見えてしまっている。

「そう言って貰えると助かる。
ほら、お前も私の後ろに隠れていないで侯爵たちに挨拶しなさい。
前々から話していたお前の婚約者もいるのだぞ」

公爵は父さんの言葉を聞いて穏やかに微笑むと、彼の後ろに隠れている子供を僕達の前に出した。

「・・・・・ほう」

その子供を見て僕は微かに簡単の声を漏らしてしまう。
公爵よりもさらに薄く、光が反射し輝く青髪は背中まで流れ、キラキラと輝く碧眼は身長の差もあり上目遣いで僕を見る。
よく出来た人形のように整った目鼻立ちは、彼女が将来美しく育つ事を予見している。

「は、はじめ、まして、セリューネ家の、４女の、セラス・ラ、ルフェ・ド、セリューネ、です」

所々言葉に詰まりながら、舌足らずな口調で彼女は僕達に可愛らしく自己紹介をする。
この少女が僕の婚約者になったセリューネ家４女・・・か。

自己紹介をした後オロオロと僕たちとセリューネ公爵を見ている彼女は非常に可愛らしい。

ちらりと横目で見た父さんは彼女の愛らしさに早くも陥落寸前で、表情が緩んできている。

僕もロリコンという訳ではないけど彼女を見て少し胸の鼓動が早くなるのを感じた。

ごめん嘘ついた。

僕はロリコンだ。

「はじめましてお嬢さん。

私はアリスト家が嫡男、アリスト・ラズム・コネサンス・ド・デュステールです。

この度は貴女の婚約者となれて天にも昇る想いです」

僕はそう言って彼女の手をとり、手の甲に軽く口づけをした。何度もパーティーに行くとこんなもの慣れたものだ。

しかし初心な彼女は顔を赤くして俯いてしまった。

そんな彼女の反応を見て思わず心が穏やかになってしまう。

しっかりしろ僕、今は仇敵の前なんだぞ!!

僕はすぐさま気を引き締め、緩みかけた口元を戻す。

「話には聞いていたが随分と聡いものだ。

いやはや、最年少スクウェア、始祖ブリミル以来の大天才の名は伊

達ではないようだな」

セリューネ公爵は目を細めて僕をじっと見た。
態度こそ落ち着いているが、その目は予想以上の獲物に興奮した狩人のようだ。

「いえ、そう大したものではありませんよ。
この程度ならば社交の場に出れば嫌でも身につくものです」

僕はやや困ったように笑う。傍目からは過大な評価に釣り合おうと苦労している子供に見えるだろう。
しかし目だけは冷ややかに、興奮するなと諫(いさ)めるかのように公爵の瞳を見据えた。

ここで公爵に露骨な敵意を向けるのは当然ながら危険な事だが、あまり彼の思い通りにさせていると、彼の勢いは止まらず我が家への干渉を強めてくるだろう。
それはまずいので、僕は彼の勢いを危険にならない程度に削らなければならない。
我が家はまだセリューネ家に跪(ひざまず)いていないと諭すように。

「・・・・・ほう。
全くもって大したものだ。
私は急にアリスト殿と話がしたくなったぞ」

効果は抜群のようで、彼の瞳から興奮の色は薄れて最初の瞳に戻りかけている。
僕はすかさず目から冷ややかな色を消して、感情を感じさせない穏やかな色に切り替えた。

「なんでしょうか公爵？
私で良ければ喜んでお相手しますが」

本来ならば侯爵家とはいえ家督を継いでいない身の上で公爵家当主を爵位で呼び捨てる事は礼儀知らずとなるが、僕の場合は最年少スクウェアということでそれなりの権威を持っている。
ゆえに誰からも僕の言葉遣いを咎められる事はない。

公爵は僕の言葉ににやりと笑った。

「そうか、それは良かった。
では今夜さっそく話がしたい。パーティーが終わった後、貴殿の部屋に使いを送る。よろしいかな？」

どうやら今夜にも勝負を仕掛けてくるようだ。
出来る事ならばパーティーの後は１０歳児の体力ゆえに勝負は止めて欲しいのだがね。

横目でチラリと伺ったところ、父さんは僕が評価されて喜んでいるだけで全く役に立たない。
僕の婚約者であるセラスお嬢さんは未だに顔を赤くしてオロオロしてらっしゃる。
どちらも話を中断させる材料にはなりえない。

はあ、仕方ないか。

「ええ、分かりました。
今夜は部屋で大人しくしておきましょう」

「では、今夜また。

良かったら私達の挨拶巡りが終わった後はセラスと遊んでやってくれ。
失礼する」

セリューネ公爵はセラスちゃんの手を取り違う貴族のところへ行ってしまった。
パーティーの主催者というのも苦労するものだ。
僕は公爵たちの背中を見ながら、彼らの苦労に鼻で笑った。

しかし今夜は面倒な事になりそうだ。僕は軽くため息をつき後ろの父さんに振り返った。
父さんはいつの間にやら皿に料理を取って食べていた。家の食卓ではまず見る事のできない柔らかそうなステーキをパクパクと口に入れて、おいしそうに咀嚼(そしゃく)している。

無性に父親を殴りたくなった。

天井に何個も吊るされている豪奢なシャンデリアは広間にいる人々を眩い光で照らす。
その中には父親を冷めた目で見る子供の姿があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0810t/

極貧貴族の領地育成計画

2011年11月27日02時35分発行